岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第398集

猪岡館跡第2次発掘調査報告書

一関遊水地事業関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

猪岡館跡第2次発掘調査報告書

一関遊水地事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、10,000ヵ所以上の遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保護・保存し、後生に伝えていくことは我々県民に課せられた重大な責務であります。一方、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発もまた県民の切実な願いであり、このような埋蔵文化財の保護・保存と地域開発事業との調和のとれた政策が今日的課題となっております。

当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本書は、一関遊水地事業に関連して、平成13年度に調査した猪岡館跡の調査結果をまとめたものであります。調査によって、本遺跡は縄文時代および近世の集落跡、中世の城館跡が複合する遺跡であることが確認されました。主体である中世の城館期においては、掘立柱建物跡や堀跡のほか門跡や柵列が確認され、当時の城館構造の一部が明らかになりました。

この報告書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご援助・ご協力を賜りました国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所や平泉町教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成15年1月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　合　田　　武

例　言

1．本報告書は、岩手県西磐井郡平泉町長島字堀崎76-2ほかに所在する猪岡館跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、一関遊水地事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．岩手県遺跡登録台帳に記載される遺跡番号・遺跡略号は、ＮＥ76-2347・ＩＯＴ-01-2である。

4．発掘調査期間は、平成13年７月９日～11月16日、調査面積は9,000㎡である。担当者は、濱田宏・吉川徹・飯坂一重・溜浩二郎・杉沢昭太郎・中村直美・原美律子・北田徹である。

5．室内整理期間は平成13年11月１日～平成14年３月31日、濱田宏・吉川徹が担当した。

6．本報告書の執筆は、Ⅰを中川重紀、それ以外と編集を濱田が担当した。

7．発掘調査では、国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所、平泉町教育委員会、岩手県教育委員会のご協力をいただいた。

8．本報告書の作成にあたり、次の方々にご指導いただいた。（順不同・敬称略）
工藤雅樹（福島大学）、宮野秀文（盛岡市教育委員会）、三浦謙一・佐藤嘉広（岩手県立博物館）、
本澤慎輔・及川司・八重樫忠郎・菅原計二・鈴木江利子（平泉町教育委員会）

9．野外調査では平泉町・一関市・胆沢町・衣川村・東山町の作業員三十数名のほか、柳之御所遺跡発掘作業員、平泉町教育委員会職員および作業員のご協力をいただいた。
室内では当センター期限付職員２名で整理作業を行った。

10．委託業務は以下の機関に依頼した。

＜基準点測量・基準杭設置＞	㈱一測設計
＜地形測量＞	㈱シン技術コンサル
＜空中写真＞	東邦航空（セスナ機）
	㈱シン技術コンサル（ラジコンヘリコプター）
＜石質鑑定＞	「花崗岩研究会」
＜金属製品の保存処理＞	岩手県立博物館

11．調査成果の一部は調査略報に概略を掲載しているが、本書と記載事項が異なる場合はすべて本報告書が優先する。

12．調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターで保管・管理している。

凡　例

1．本報告書に記載した遺構図の方位は平面直角座標第Ⅹ系の座標北を、遺構図の水糸レベルは海抜高度を示す。
2．遺構図の縮尺は、原則として掘立柱建物跡・柵列平面図・溝跡平面図・堀跡が1/100、竪穴状遺構・土坑・墓壙・柵列断面図・溝跡断面図・門跡・道路跡・堀跡の杭列断面図を1/50とした。
3．掘立柱建物を構成する柱穴平面図のスクリーントーンは柱痕を表わす。
4．各平坦部の遺構配置図は縮尺1/300で掲載した。それには等高線を入れているが、いずれも地山面（遺構検出面）で作図したものである。
5．巻末には、付図１として調査区域内の現況地形図(縮尺1/500)を、付図２として縄張図(縮尺1/1,000)を添えた。付図２は当センター北田熊が作図したものである。
6．層名は基本層序にはローマ数字を、遺構の埋土には算用数字を用いて区別した。
7．土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。
8．遺物実測図の縮尺は、剝片石器2/3、礫石器1/3、縄文土器・鉄製品・陶磁器がそれぞれ1/2、銭貨は原寸である。
9．遺物写真図版の縮尺は遺物実測図のそれに準じている。
10．遺構図版内の柱穴一覧表及び表３において、例えばＰ１はＰ001、Ｐ10はＰ010などとなっているが、これは処理上の問題で、同一の遺構を指している。

目　次

序
例言
凡例
報告書抄録

＜本　文＞

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境……1
1．遺跡の位置と立地……1
2．地形・地質……4
3．基本層序……5
4．歴史的環境と平泉町内の城館……6

Ⅲ　野外調査と室内整理の方法……13
1．野外調査……13
2．室内整理……14

Ⅳ　検出された遺構と出土遺物……16
1．遺構……16
（1）　1号平坦部検出遺構……16
（2）　2号平坦部検出遺構……18
（3）　3号平坦部検出遺構……20
（4）　4号平坦部検出遺構……23
（5）　5号平坦部検出状況……34
（6）　6号平坦部検出遺構……34
（7）　堀跡（1号～6号）……36
2．出土遺物……38

Ⅴ　まとめ……42
1．遺構と遺物……42
2．縄張と城域……43

＜図　版＞

第１図　岩手県全図にみる猪岡館跡の位置……２
第２図　遺跡の位置(１：25,000 一関) ……３
第３図　地形分類図……４
第４図　基本層序……５
第５図　平泉町内の城館……７・８
第６図　猪岡館跡全体図……10
第７図　トレンチ配置図……11
第８図　１号平坦部遺構配置図……17
第９図　１号平坦部検出遺構……18
第10図　２号平坦部遺構配置図……19
第11図　２号平坦部検出遺構……20
第12図　３号平坦部遺構配置図……20
第13図　３号平坦部検出遺構……22
第14図　４号平坦部遺構配置図……24
第15図　４号平坦部検出遺構(1)……25
第16図　門跡周辺図……26
第17図　４号平坦部検出遺構(2)……26
第18図　４号平坦部検出遺構(3)……27
第19図　４号平坦部検出遺構(4)……29
第20図　４号平坦部検出遺構(5)……30
第21図　４号平坦部検出遺構(6)……30
第22図　４号平坦部検出遺構(7)……31
第23図　４号平坦部検出遺構(8)……33
第24図　５号平坦部等高線図……34
第25図　６号平坦部遺構配置図……35
第26図　６号平坦部検出遺構……35
第27図　５号・６号堀跡……37
第28図　出土遺物(1)……40
第29図　出土遺物(2)……41
第30図　猪岡城址説明略図……42
第31図　門跡と櫓列のセット関係……43
第32図　北上川河川台帳図(明治42年)と調査区…45
第33図　猪岡館の堀割り区画……46

＜写真図版＞

写真図版１　空中写真……51
写真図版２　各平坦部の空中写真(1)……52
写真図版３　各平坦部の空中写真(2)・基本層序…53
写真図版４　掘立柱建物・門跡周辺……54
写真図版５　１号平坦部検出遺構……55
写真図版６　２号平坦部検出遺構……56
写真図版７　３号平坦部検出遺構(1)……57
写真図版８　３号平坦部検出遺構(2)……58
写真図版９　３号平坦部検出遺構(3)
　４号平坦部検出遺構(1)……59
写真図版10　４号平坦部検出遺構(2)……60
写真図版11　４号平坦部検出遺構(3)……61
写真図版12　４号平坦部検出遺構(4)……62
写真図版13　４号平坦部検出遺構(5)……63
写真図版14　４号平坦部検出遺構(6)
　５号平坦部検出状況……64
写真図版15　６号平坦部検出遺構……65
写真図版16　１号堀跡・２号堀跡(1)……66
写真図版17　２号堀跡(2)・３号堀跡……67
写真図版18　４号堀跡・５号堀跡……68
写真図版19　６号堀跡……69
写真図版20　出土遺物(1)……70
写真図版21　出土遺物(2)……71

報告書抄録

ふりがな	いのおかたてあとだいにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	猪岡館跡第２次発掘調査報告書
副書名	一関遊水地事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第398集
編著者名	濱田　宏・吉川　徹
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL 019-638-9001
発行年月日	西暦2003年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
猪岡館跡 (いのおかたてあと)	岩手県西磐井郡平泉町長島字須崎76-2 (いわてけんにしいわいぐんひらいずみちょうながしまあざすさき)	03402	NE76-2347	38度 58分 37秒	141度 09分 11秒	2001.07.09 ～ 2001.11.16	9,000m²	一関遊水地事業関連緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
猪岡館跡	城館跡	縄文・中世	竪穴状遺構　1棟 掘立柱建物跡　1棟 土坑　12基 溝跡　12条 柱穴　132個 堀跡　6条 門跡　4棟 柵列　5条 通路跡　1ヶ所 墓壙(近世)　1基	縄文土器(前・晩期) 石器類・陶磁器・銭貨 金属製品(鉄釘)	北上川に向かって扇形に開く城域350～400m×150～200mの中世末の城館跡。 門跡・柵列・通路跡が確認された。

Ⅰ　調査に至る経緯

猪岡館跡は「一関遊水地事業、第２遊水地管理用道路工事」の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

一関遊水地事業は、北上川上流改修の一大プロジェクトとして、岩手県一関市・平泉町地区を洪水から守るため、二線堤方式による遊水地を建設するもので、上流ダム群とともに北上川治水計画の根幹をなすものである。遊水地は延長25㎞の周囲堤と延長18㎞の小堤に囲まれた、第１遊水地から第３遊水地まであわせて1,450haからなり、洪水調整・市街地等の水害防御および土地の高度利用を目的とするものである。事業は、昭和48年３月に工事実施基本計画が決定されたのを受けて本格的な着工の運びとなった。

猪岡館跡については、岩手県遺跡基本図により第２遊水地管理用道路予定地に遺跡存在の可能性があったため、平成12年11月６日付けで国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所の依頼を受けた岩手県教育委員会が平成12年度に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺跡と確認されたため、岩手県教育委員会が国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成13年６月20日付けで岩手工事事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約し、同年７月９日から猪岡館跡の発掘調査に着手した。

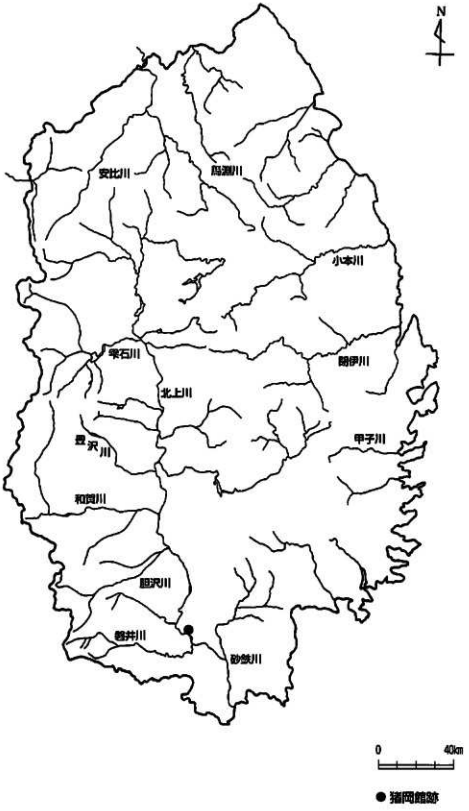
Ⅱ　遺跡の立地と環境

１．遺跡の位置と立地

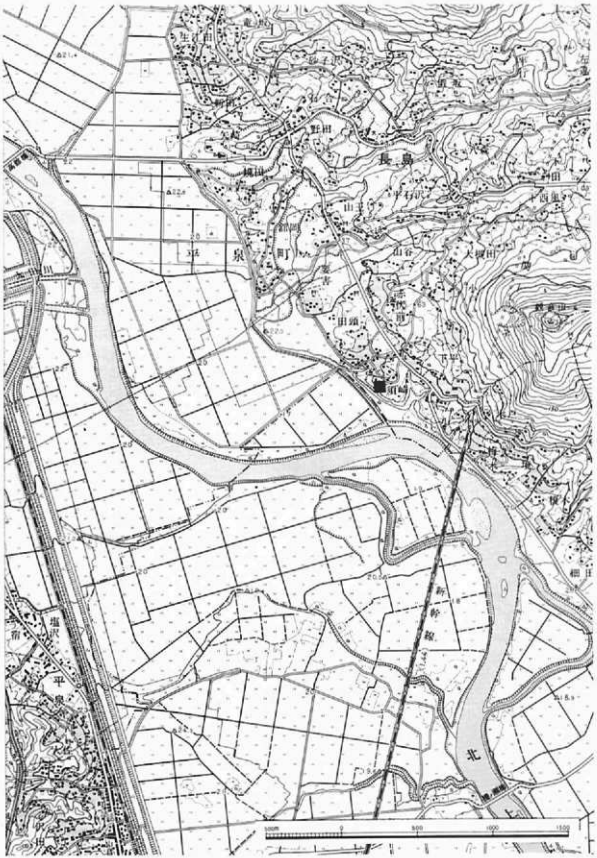
猪岡館跡にある平泉町は岩手県南部に位置し、北は胆沢郡衣川村と前沢町、南と西は一関市、東は東稲山を境に東磐井郡東山町と接する。町の総面積は63.75㎢で、そのおよそ半分は山林・原野が占め、水田・畑地の割合は３割弱である。人口は、昭和20年代半ばに１万人を越えたがそれ以降は減少傾向にあり、現在はおよそ9,000人強となっている。平泉町には奥州藤原氏を今に伝える遺産、平安美術の宝庫といわれる「中尊寺」、特別史跡・特別名勝の二重の指定を受ける「毛越寺」があり、年間200万人以上の観光客が訪れる全国有数の観光都市として知られている。また平成12年度には、世界遺産の暫定リストに「平泉の文化遺産」として登録され、国内外でさらに知名度を上げることとなった。今後は、文化遺産本体のみならず周辺環境を含めた保存に向けて、官民一体となった動きが必要となろう。

猪岡館跡は平泉町の南東端、北上川左岸の長島地区に所在し、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅からは東南東に2.8㎞ほどの距離がある。遺跡の東側には主要地方道一関・北上線が間近に通っている。遺跡は北上川によって形成された河岸段丘の縁辺部に立地し、蛇行して東に向きを変えて流れる北上川を西側に臨む。東には標高596ｍの東稲山、その南に標高325ｍの観音山が聳え、これら周辺の雄大な景観は城館として機能していた当時を思わせる。

猪岡館跡は、西磐井郡平泉町長島字須崎76-2ほかに所在し、国土地理院発行の５万分の１地形図「一関」



第１図　岩手県全図にみる猫岡館跡の位置



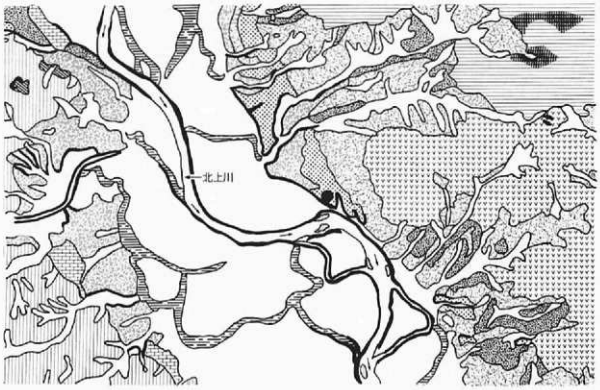
第2図　遺跡の位置（1：25,000　一関）

（ＮＪ-54-14-15）及び２万５千分の１地形図「一関」（ＮＪ-54-14-15-1）内にある。調査区中央部の経・緯度は、北緯38° 58′ 37″東経141° 9′ 11″である。

２．地形・地質

平泉町周辺は、東は北上山地、西は奥羽山脈に囲まれ、その中央部を一級河川北上川が南流している。宮城県追波湾に注ぐ北上川は、一関市狐禅寺付近の狭窄部が要因の一つとなって度々大洪水をおこし、この地方に甚大な被害を与えている。前述のとおり、一関遊水地事業はその水害の防御と土地の高度利用を目的として実施されているところである。

平泉町は北上川の中流域にあたり、この川によって形成された氾濫平野や谷底平野、後背湿地などの低地と河岸段丘上にのる。町はその北上川を境として、西側の平泉地区と東側の長島地区に大きく二分される。北上川西岸の平泉地区はそのほとんどが衣川丘陵からなり、解析が及んでいない丘陵緩斜面域では牧場等に



第３図　地形分類図

利用されている。町の中心部は北上川と太田川によって解析された段丘と氾濫原上にあって、多くの藤原氏関連の遺跡と重なり、この地域に暮らす町民はこれら文化遺産と生活を共にしている。一方、東岸の長島地区は北上川の氾濫原と東縁西麓丘陵からなるが、丘陵地の大部分は侵食性の緩斜面で、遺跡の多くはその侵食された段丘の縁辺部と支流谷沿いにある。遺跡として台帳に登載されている中世城館のいくつかはこの段丘沿いに立地しているが、猪岡館跡もまたそのうちの一つである。近年、この長島地区で大規模な場整備事業が施工され、それに伴う事前の発掘調査で北上川東岸の沖積地にも藤原氏関連の遺跡があることが確認された。和銭の出土をみた里遺跡、十和田a降下火山灰に覆われた水田跡が検出された竜ヶ坂遺跡、荼毘所と思われる遺構や中世の墓域、平安期の畠跡などが見つかった本町Ⅱ遺跡、それに隣接する畑中遺跡がそれである。いずれも、従来冒われてきた藤原時代「都市平泉」の構造を再考すべき内容をもっており、注目される遺跡群である。

平泉町やその周辺地域の地質は、南北に縦断する森岡－白河線と呼ばれる構造線によって東西に分けられる。その西側は新生代新第三紀以降の堆積岩や火山岩が分布し、東側では石灰岩・花崗岩・礫岩・泥岩などで構成される古生層が基盤岩類となっている。北上川によって形成された沖積地や扇状地の堆積物は、砂礫泥からなり、多くは泥を主体とした細粒堆積物である。

3．基本層序

調査区内では、ほぼ全域で第4図のような層序が観察された。以下に各層の特徴を示す。

〈第Ⅰ層〉 にぶい黄褐色土（10YR4/3） シルト 草木根を多く含む表土・耕作土。斜面部で厚い。層厚5～20cm。

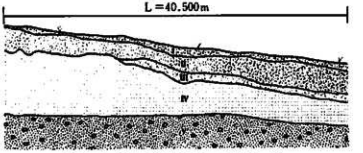
〈第Ⅱ層〉 にぶい黄褐色土（10YR5/4） シルト 黄褐色土の極小ブロック等を含む。本層も斜面部で厚くなる。層厚10～25cm。

〈第Ⅲ層〉 にぶい黄褐色土（10YR5/3） シルト 黄褐色土のブロックを含み、Ⅱ層より黒味を帯びる。緩斜面に部分的に存在する中世段階の堆積層と思われる。普請等、人為的なものかは不明である。層厚5～10cm前後。

〈第Ⅳ層〉 明黄褐色土 （10YR6/6） 粘土質シルト 粘性のある地山。遺構検出は本層上面である。層厚15～50cm。

〈第Ⅴ層〉 明黄褐色土 （7.5YR5/6） 砂質土 小礫をわずかに含む砂層。層厚は確認してない。

なお、第4図の土層観察地点は、1号平坦部T2、ⅡA2j グリッドから東に2.5m（第7図トレンチ配置図参照）である。



第4図 基本層序（ⅡA2i～2i グリッド）

4．歴史的環境と平泉町内の城館

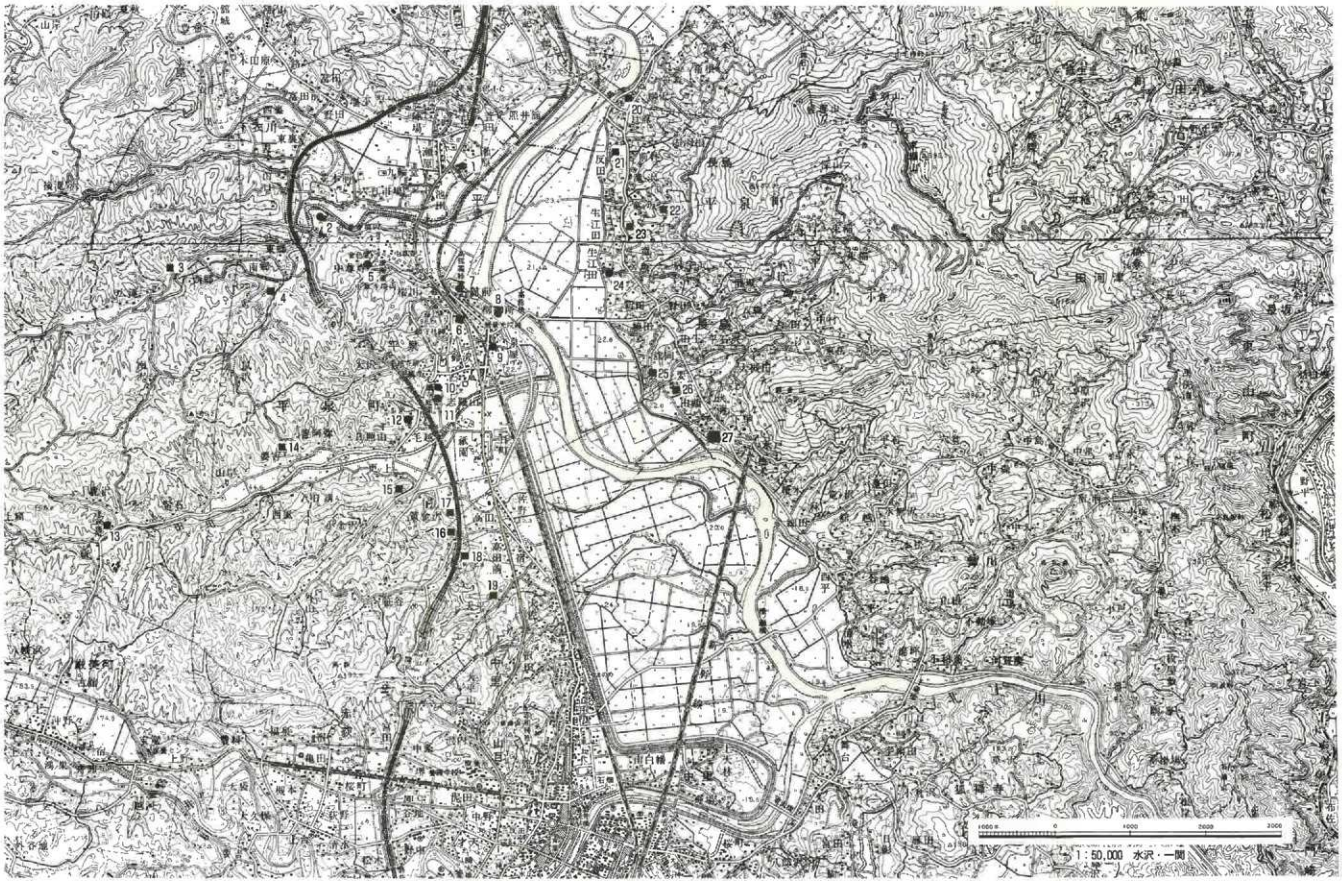
猪岡館のある平泉町長島地区は、北は胆沢郡前沢町、東稲山の稜線を境として東側は東磐井郡東山町、南は一関市に接している。西側を北上川が南流するが、川の東岸は頻繁に増水し洪水被害を受けるため、現在の集落もそこを避け山麓側にわたって散在している。

表１の20以降（24を除く）に示した北上川左岸の河岸段丘上にある中世の城館群は、この北上川とそれに流れ込む幾筋もの小河川や沢をうまく防御施設として利用した要害である。これらの中でも今回調査した猪岡館は、当時洪水に見舞われることもなく、むしろ北上川の交通網を掌握し水運で栄えていたようである。このことは、慶長五年（1600）『葛西大崎船止日記』に「一　にしおしま（小島村）の内　ふね四そう」、『安永風土記』に「一　宿屋数　弐軒」とあることから窺える。

文治五年（1189）の役による藤原氏滅亡後、陸奥国は鎌倉幕府の統治下に置かれ、新たに入部してきた関東御家人に支配されることとなった。これにより磐井郡は葛西氏の封土となって、葛西清重以来その治下にあった。猪岡氏は、磐井川西北部の猪岡村に拠った葛西氏の家臣で当地方の地頭と推量されるが、旧記にはその伝承が湮滅して伝わらないという（『一関市史』第一巻）。猪岡文書によると、猪岡氏は応永七年（1400）から天正一八年（1590）まで190年間猪岡村を領し、葛西晴信の信頼は厚く領内安堵に尽くした旨の記述があるが、この文書は偽文書とする向きもある。晴信は、永禄三年（1560）猪岡又太郎に対して「山ノ目村・中尊寺村・前堀村」の諸頭として、馬上五十騎・与力百人・弓三十人・鑓二十人を付属せしめた。磐井川北畔の線から衣川の線に至る間の治安を委ねたものとされる（『岩手県史』第３巻）。加えて、猪岡村のほかに「岩井郡之内平泉村ニ而三千苅、黒沢村ニ而弐千苅」を加増した。また、天正三年（1575）の本吉氏と気仙郡長部氏の争乱の際には磐井・胆沢の城主が動員され、猪岡弥太郎は白鳥村で二千苅を加えられた（『猪岡文書』）。その後、天正五年（1577）には長部氏、天正十四年（1586）には本吉氏・歌津十二人衆とも兵乱があったという。天正十八年（1590）八月、葛西氏は豊臣秀吉の奥羽仕置によって滅び、猪岡氏はそれとともに、猪岡館城主猪岡玄蕃の末裔、牟人の代で没落したとされる。この猪岡館の城主は、『仙台領古城書上』『安永風土記』に伝えられている。

猪岡館は、『風土記』に「猪岡城」として、東西176間、南北65間とその大きさが記され、『仙台領古城書上』にも「平東城」として、「本丸」東西54間、南北28間、「二の丸」東西30間、南北37間と記されている。また、紫桃正隆は『仙台領内古城・館』第１巻において、平泉町内の古城館を15ヶ城挙げ、各城館の規模・構造・歴史等を示しているが、猪岡館は「河岸段丘上に構えられた平城形式で、天嶮と土塁、空濠、水濠などの人工防塁が程よく調和した大要害」とし、その規模を「東西200m、南北150mもある壮大な城館と言えよう」と評している。これには概略図（第30図に転載）が掲載されているが、その中に大手門が描き込まれ、「大手門らしい跡も認められる」との記述もある。これは、今回の発掘調査で確認された門跡とほぼ同じ地点と思われ、紫桃氏が現地を踏査した際に何らかの痕跡があったものか、不自然な地形から当時の普請・作事を推測しての判断かは不明であるが、氏の城館に対する観察力のすばらしさを感じた。

平泉町内の城館跡は、柳之御所遺跡など平安後期藤原時代のものも含めて27箇所が知られているが、それ以外は多くが中世末戦国期の城館跡である。既述したように、北上川左岸の城館跡８箇所はすべてこれに該当する。第５図には町内の各城館跡の位置を、表１には所在地・城主などその内容を示したので参照していただきたい。



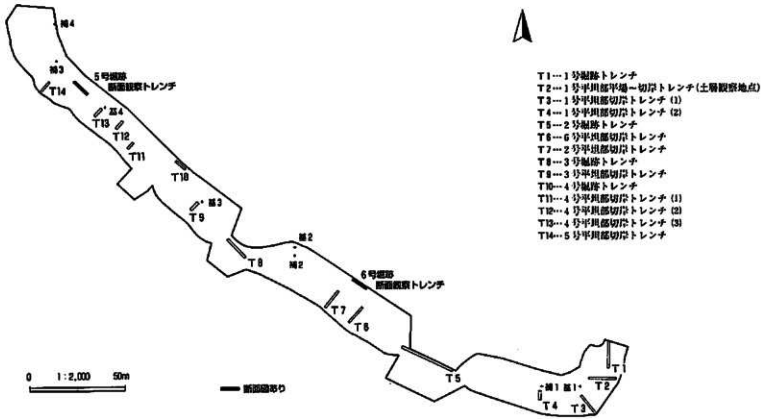
(●は古代、■は中世)

第5図　平泉町内の城館

表1　平泉町内の城館

番号	城館名	別称	所在地	現況	遺構など	城主	文献	時期
1	瀬原橋		平泉字瀬原	水田・畑地	不明		「陸奥話記」	古代後
2	泉ヶ城	和泉ヶ城	平泉字泉ヶ城	水田・畑地	主郭（160×160m）、北に副郭	安倍貞任、泉三郎忠衡	「古城書上」「風土記」「平泉史」	古代後
3	伊能館	戌館	平泉字西郷	水田	主郭（90×50m）、自然の堀		「風土記」「平泉史」	古代後
4	鶴ヶ館	古館	平泉字南郷	山林	不明	黒沢兵庫	「風土記」	中世末
5	中尊寺境内		平泉字衣関・坂下	特別史跡	伽羅遺構、大長寿院に向かう堀あり		「風土記」「平泉史」	古代末
6	花立Ⅰ	葛西屋敷？	花立	畑地	主郭・副郭破壊、堀あり	葛西三郎清重より三代	「風土記」「平泉史」	中世初
7	高館	衣川館	平泉	山林	主郭（20×20m）、西側に副郭	藤原秀衡、源義経、民部少輔基成	「古城書上」「風土記」「平泉史」	古代末
8	柳之御所	平泉館	平泉字柳之御所	水田・畑地・民家	4本の堀で5郭に分けられる	藤原清衡・基衡・秀衡・泰衡	「風土記」「平泉史」	古代末
9	伽羅之御所		伽羅楽	水田・畑地・民家	8に南接、北側に土塁	藤原秀衡・泰衡	「吾妻鏡」「風土記」「平泉史」	古代末
10	国衡館	西永戸第	平泉字倉町	学校用地	主郭（200×90m）、西側に土塁・副郭	藤原国衡	「風土記」「平泉史」	古代末
11	高衡館	隆衡館	平泉字倉町	畑地・寺院・民家	10の南側	藤原国衡	「風土記」「平泉史」	古代末
12	毛越Ⅴ	勅使館？	平泉字毛越	畑地	不明		「風土記」「平泉史」	古代末
13	西光寺	達谷館	平泉字北沢	山林	尾根に堀切、その東に土塁	僧兵の館跡か		中世末
14	安土館	日向館	要害	山林・水田・民家	主郭（80×50m）、東に副郭、板碑あり	安土日向守	「古城書上」「風土記」「平泉史」	中世末
15	鳥屋崎館		更の上	山林	不明	鳥屋崎備中守	「風土記」「平泉史」	中世末
16	黒沢館		片桐	山林	不明		「平泉史」	中世末
17	片岡屋敷		平泉字片岡	畑地	不明	片岡八郎	「風土記」「平泉史」	中世？
18	新城館		高田前	山林	主郭（40×20m）、北に副郭と平場		「風土記」	中世末
19	大佛館		樋の沢	山林	主郭（40×10m）、東に平場、西に堀切	黒沢豊前	「風土記」「平泉史」	中世末
20	月館	桑館	長島字月館	水田・畑地・宅地	主郭（90×80m）、東西に堀と土塁？	及川雅楽亮？	「風土記」	中世末
21	二反田館	内館	長島字二反田	水田・畑地・宅地	主郭（90×80m）、東・南に堀、副郭	千葉長門	「古城書上」「風土記」	中世末
22	長部館		長島字滝ノ沢	山林・畑地	主郭（105×35m）、堀・土塁・平場あり	長部兵部大夫	「風土記」	中世末
23	道樹館	西館	長島字竜ヶ坂	水田	3段の平場、見張りと思われる平場あり	千葉修理	「古城書上」「風土記」	中世末
24	佐藤屋敷	庄司屋敷	長島字生江田	スギ林・水田	平成13年度町教委調査、柱穴多数	佐藤庄司	「平泉史」	古代末
25	館岡館	古館、西館	長島字館岡	水田・畑地・宅地	主郭（130×120m）、丘陵に堀3条		「古城書上」「風土記」	中世末
26	小島館	古館	長島字古館	水田・畑地・宅地	主郭（150×140m）中央に八幡宮、東に堀	小島三右衛門	「風土記」	中世末
27	猪岡館	栗城	長島字栗崎	水田・畑地・宅地	主郭（130×100m）に門跡・岡列確認	猪岡玄蕃	「古城書上」「風土記」	中世末

第6図　発掘調査区全体図


T1…1号掘跡トレンチ
T2…1号平坦部平場～切岸トレンチ(土層観察地点)
T3…1号平坦部切岸トレンチ(1)
T4…1号平坦部切岸トレンチ(2)
T5…2号掘跡トレンチ
T6…6号平坦部切岸トレンチ
T7…2号平坦部切岸トレンチ
T8…3号掘座トレンチ
T9…3号平坦部切岸トレンチ
T10…4号掘跡トレンチ
T11…4号平坦部切岸トレンチ(1)
T12…4号平坦部切岸トレンチ(2)
T13…4号平坦部切岸トレンチ(3)
T14…5号平坦部切岸トレンチ
5号掘跡
断面観察トレンチ
6号掘跡
断面観察トレンチ
0 1:2,000 50m
断面図取り

第7図　トレンチ配置図

〈引用・参考文献〉

朝倉雄大　(2000)：『佐野遺跡第１次・三日町１遺跡第２次発掘調査報告書』岩文埋調査報告書第313集　(財)岩埋文

浅沼午郎ほか　(1998)：『岩手県姓氏歴史人物大辞典』角川日本姓氏歴史人物大辞典３　角川書店

岩手県教育委員会　(1963)：『岩手県中世文書　中巻』　国書刊行会

岩手県教育委員会　(1986)：『岩手県中世城館跡分布調査報告書』　岩手県文化財調査報告書第82集　岩手県教育委員会

岩手県農政部北上開発室　(1978)：『北上山系開発地域　土地分類基本調査　一関』

金子昭彦　(1993)：『新山権現社遺跡発掘調査報告書』　岩文埋調査報告書第188集　(財)岩埋文

金野静一ほか　(1990)：『岩手県の地名』日本歴史地名大系３　平凡社

紫桃正隆　(1972)：『史料　仙台領内古城・館』第一巻　「平泉町内の古城館」

菅原計二ほか　(1993)：『志羅山遺跡第13・15・16・17・18・20次発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書35集　平泉町教育委員会

花坂正博ほか　(1997)：『瀬原Ⅰ遺跡第２次・第３次発掘調査報告書』岩文埋調査報告書第257集　(財)岩埋文

平泉郷土館　(1987)：『平泉の埋蔵文化財』平泉郷土館図録第１冊

本中眞　(2001)：「今、世界遺産委員会で語られていること」『平泉文化研究年報第１号』　岩手県教育委員会

『岩手県史』第２巻（中世篇上）

『岩手県史』第３巻（中世篇下）

『一関市史』第１巻　通史

『宮城県史』27　風土記

『宮城県史』32　史料集　風土記補遺

『東磐井郡誌』

『長島村誌』

Ⅲ　野外調査と室内整理の方法

1．野外調査

（1）調査区の地区割とグリッド設定

今回の発掘調査区は道路路線内ということもあって、城館平坦部の縁辺とそれから続く切岸を縦断する細長い形になっていた。これと周辺地形も考慮しながらグリッドを設定しなければならなかったが、最終的には国土座標第Ⅹ系に合わせることにした。調査区内の５つの平坦部に３級基準点４点と補点４点の計８点を打設し、それを基にグリッドを設定した。８点の成果値は以下のとおりである。

基準点１（１号平坦部）	Ｘ＝－113,600.000ｍ	Ｙ＝27,900.000ｍ	Ｈ＝41.146ｍ
基準点２（２号平坦部）	Ｘ＝－113,525.000ｍ	Ｙ＝27,750.000ｍ	Ｈ＝42.741ｍ
基準点３（３号平坦部）	Ｘ＝－113,500.000ｍ	Ｙ＝27,700.000ｍ	Ｈ＝41.445ｍ
基準点４（４号平坦部）	Ｘ＝－113,450.000ｍ	Ｙ＝27,650.000ｍ	Ｈ＝41.547ｍ
補点１（１号平坦部）	Ｘ＝－113,600.000ｍ	Ｙ＝27,880.000ｍ	Ｈ＝41.762ｍ
補点２（２号平坦部）	Ｘ＝－113,530.000ｍ	Ｙ＝27,750.000ｍ	Ｈ＝42.700ｍ
補点３（５号平坦部）	Ｘ＝－113,425.000ｍ	Ｙ＝27,625.000ｍ	Ｈ＝39.965ｍ
補点４（５号平坦部）	Ｘ＝－113,405.000ｍ	Ｙ＝27,625.000ｍ	Ｈ＝40.162ｍ

グリッドは、起点を南東隅に置き、南から北方向にローマ数字のⅠ・Ⅱ・Ⅲ……、東から西方向にアルファベットのＡ・Ｂ・Ｃ……を付し50ｍの大グリッドとした。さらに５×５ｍの小グリッドを設定し、南北方向に算用数字１－０まで、東西方向にアルファベットａ～ｊを与え、その組み合わせによってグリッド名とした。（第６図参照）

（2）雑物除去・粗掘・遺構検出

現場設営後、調査は木の枝葉や竹などの雑物除去に入ったが、調査区内に散乱した雑物の量の多さに相当の時間を要することとなった。雑物除去に費やした日数は、実質1.5ヶ月ほどである。本調査は、城館調査ということもあり事前に現況の地形測量を行っているが、この館跡は自然地形の沢を堀としていたため、その部分の雑物はより丁寧に取り除き、正確に図化されるよう心がけた。写真測量の撮影日は、お盆も過ぎた８月28日(火)のことであった。

その後、岩手県教育委員会事務局文化課（現生涯学習文化課）が実施した試掘結果の確認のため、試掘坑のクリーニングを行うとともに表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確かめた。表土および遺物の包含されない層の除去には重機を使用したが、進入路が確保できず難渋した箇所があった。その部分は、１ｍあまりの盛土を人力で除去した。遺構の検出は、第Ⅳ層の地山面でのみ行った。

（3）遺構名

検出された遺構は、遺構の種類毎に確認された順に連番を付して遺構名としたが、整理した段階で付け替

えたものがある。柱穴は確認された時点でＰ１から連番を付けたが、精査後それにならなかったものについては欠番とした。また、調査時には５つの平場を「１～５号曲輪」と呼称していたが、複数の平場から主郭が構成されたり、一つと思われた曲輪が堀を挟んで二つに区切られたりしたため、「曲輪」を「平坦部」と変更して報告することにした。

（４）精査・実測

遺構は、原則として竪穴状遺構は４分法、土坑は２分法、溝跡・柵列・堀跡は最低１ヶ所の断面図を取れるように精査した。柱穴は、大形で必要と思われたものを断面図が作成できるように２分法で精査した。実測は基本的に簡易遣り方測量で行ったが、部分的に平板測量や光波測距儀（トータル・ステーション）も使用した。現場で作成した各遺構の平・断面図の縮尺はすべて1/20である。また、縮尺1/100で各平坦部における地山面の等高線図を作成したが、等高線の間隔は地形と遺構密度によってそれぞれ変えている。

なお、業者委託した調査前の現況地形図は1/200、周辺地形図は1/500の縮尺で作成している。

（５）写真撮影

野外での写真撮影には、35㎜版２台（モノクローム・カラーリバーサル各１台）と６×７㎝版モノクローム１台を使用した。空中写真は、調査途中にセスナ機による撮影を、終了時にはラジコンヘリコプターによる撮影を行っている。

（６）調査方法について

今回の調査は、土木工事的な調査であることに加え、9,000㎡の調査面積に対して期間が３ヶ月間ということもあり、堀跡や切岸の急斜面部の表土まで全面を剥ぎ取って精査することは当初から不可能な状況であった。本城館跡の調査方法については、事前にその主体を平坦部におくことが確認されてはいたが、それのみでは十分な城館調査とはならないものと思われた。よって、報告書作成のために最低限必要と思われた、次に掲げる要領で調査に臨んだ。

①それぞれの平坦部は、遺構が存在する限り全域にわたって表土を除去し精査する。

②堀跡は、まず現況写真を撮影した後、直角方向にトレンチを入れる。それによって、自然地形を利用した空堀と判断されたものは図化を省略、写真撮影のみとしそれ以外は通常の精査を行う。

③各平坦部の切岸も現況写真を撮影後、それぞれ数ヶ所にトレンチを入れ堆積状況を確認、断面写真を撮影する。図化は省略する。（堀跡・切岸に設定したトレンチ位置は第７図参照のこと）

これでも調査はほぼ１ヶ月遅延してしまった。

２．室内整理

（１）遺物の整理手順

今回の調査で出土した遺物はごく僅かで、当センターの収納用小コンテナ（45×35×９㎝）１箱に満たなかった。これらは、野外調査中の雨天時に洗浄まで行った。その後室内整理期間には、土器や陶磁器類は注記・接合・復元の順に進め報告書掲載用のものを選別後、台帳登録・実測（採拓）・写真撮影・実測図トレー

スを行った。石器類はチップ・フレイクを除いて登録し、実測後トレース・写真撮影を行った。室内整理終了の際には収納作業を行った。

（2）遺構図面

野外調査で得られた図面類は、平面図・断面図の照合後、必要に応じて第2原図を作成した。その後それらのトレースを行い、遺構図版を作成した。

（3）図版・写真図版について

遺構・遺物の図版縮尺、写真図版縮尺は凡例にあるとおりである。

Ⅳ　検出された遺構と出土遺物

1．遺構

今回、各平坦部から検出された遺構は以下のとおりである。

	掘立柱	竪穴状	土　坑	溝　跡	柵　列	門　跡	通路跡	柱　穴	墓　壙
1号平坦部			1	2					
2号平坦部					1			16	1
3号平坦部			3	5	2			8	
4号平坦部	1	1	6	4	2	4	1	98	
5号平坦部									
6号平坦部			2	1				10	
（合　計）	1	1	12	12	5	4	1	132	1

いずれの遺構も、地山である明黄褐色土層（基本層序Ⅳ層）上面で確認している。

以下、各平坦部ごとに検出された遺構について記述するが、そのために遺構種類ごとの通番で記載されておらず、順番が前後しているものがある。また、掘立柱建物・門跡などを構成しなかった柱穴状ピットについては、遺構配置図と柱穴計測表（表3・P47～48）をもってそれに代えることとする。

（1）1号平坦部検出遺構

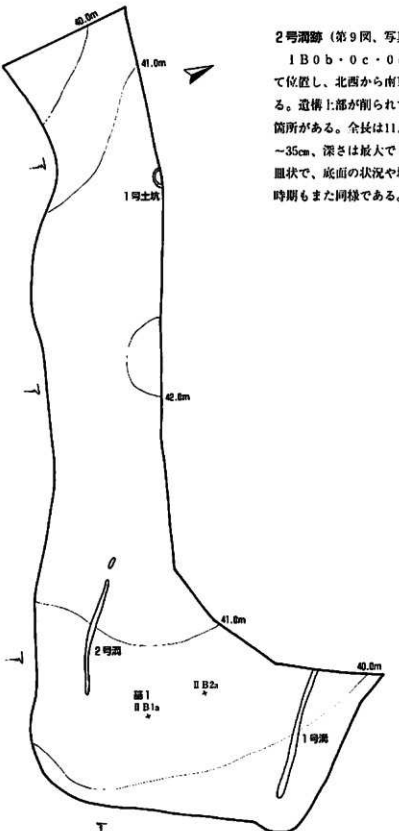
1号平坦部は、調査区南東部の自然地形を利用する1号堀跡と2号堀跡の間、猪岡館跡の南東端に存する曲輪の縁辺部である。この平坦部東側の切岸は、急崖となって北側に延び北西方向から走る沢につながって、城の東側から北側にかけての砦となっている。地山面の標高は40～42m前後で、調査前の状況は山林である。

1号土坑（第9図、写真図版5）

ⅡB4ⅰグリッドに位置する。遺構の北側ほぼ半分は調査区外に延びており、精査できなかった。確定される平面図は円形で、断面形は浅い皿状を呈している。確定される開口部径は約130cm、深さは最大で27cmである。埋土は黄褐色土の小ブロックを含む暗褐色土が主体で、炭化物や円礫が混入していた。遺物は出土していないが、埋土等から縄文時代に属する可能性がある。

1号溝跡（第9図、写真図版5）

ⅡA2ⅰ・3ⅰ・3ⅱグリッドにかけて位置する。遺構は北西から南東方向に直線状にあるが、北西側は調査区域外に延びている。精査できた長さは10.8m、上幅は17～59cm、下幅は13～35cm、深さは3～13cmである。断面形は浅皿状で、底面には緩い凹凸がある。埋土はにぶい黄褐色土の単層で、自然堆積と思われる。遺物は出土していない。本遺構は平坦部の外縁に沿うようにあって柵列となる可能性もあったが、埋土の状況と底面に柵木の痕跡が認められないことから溝跡とした。時期は不明であるが、城館期よりはかなり新しいものと思われる。



第8図　1号平垣部 遺構配置図

2号溝跡（第9図、写真図版5）

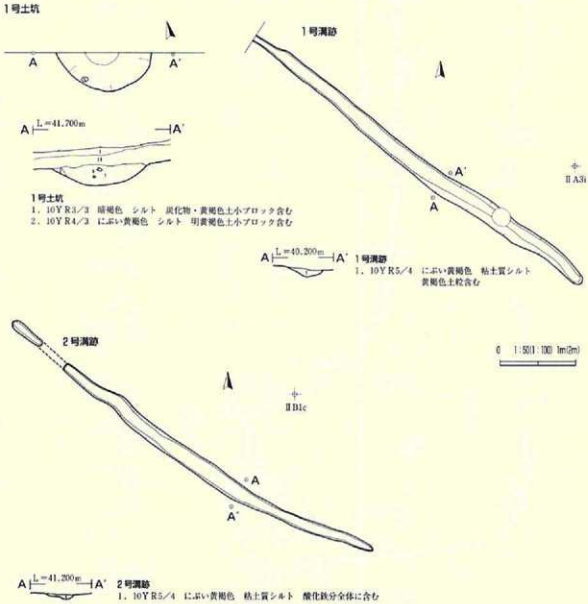
ⅠB0b・0c・0d、ⅡB1dグリッドにかけて位置し、北西から南東方向に緩く弧状に延びている。遺構上部が削られているため、途中で途切れる箇所がある。全長は11.4m、上幅20～45cm、下幅10～35cm、深さは最大で7cm程度である。断面形は浅皿状で、底面の状況や埋土は1号溝跡と同じである。時期もまた同様である。

（2）2号平坦部検出遺構

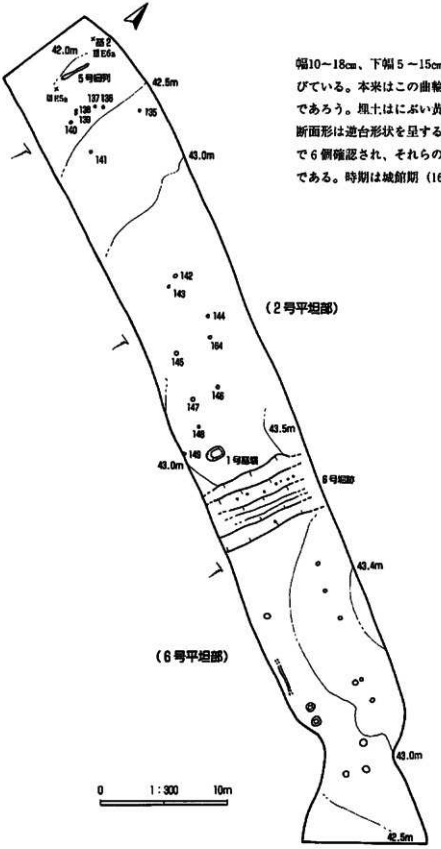
2号平坦部は調査区南西部、3号堀跡と普請された6号堀跡の間にある。当初は2号堀跡と3号堀跡間を2号平坦部と呼称していたが、その平坦部中央に堀の存在が明らかになったことから、2つに分割したものである。北上川に向かう北西側の切岸は、傾斜角30°前後の急崖となっている。本平坦部は館の中枢と思われる3号・4号平坦部の東側にある第二の曲輪を構成するものと考えられる。地山面の標高は42～43.5m前後、調査前の状況は水田である。

5号柵列（第11図、写真図版6）

ⅢD5jグリッドに位置し、この平坦部の西側外縁からおよそ1.5m内側にある。本遺構は、その外縁に沿って廻らず全長も短いが、溝の底面に橋木痕跡を有することから柵列と判断した。精査した長さは2.46m、上



第9図　1号平坦部 検出遺構



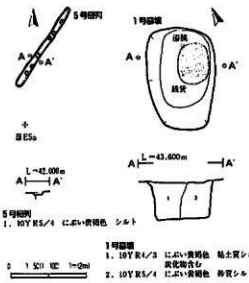
幅10～18cm、下幅5～15cmで、北東から南西方向に延びている。本来はこの曲輪の外縁に全周していたものであろう。埋土はにぶい黄褐色シルト質土の単層で、断面形は逆台形状を呈する。柵木の柱痕は明瞭なもので6個確認され、それらの径は10cm前後、深さは数cmである。時期は城館期（16世紀代）である。

第10図　2号平坦部 遺構配置図

1号墓壙（第11図、写真図版6）

ⅢＤ1ｅグリッド、6号堀跡の西側2ｍに位置する。検出した当初は、楕円形の柱痕（第11図のスクリーントーン部分）をもつ大形の柱穴として精査したが、最終的に副葬品（銭貨と漆器の被膜）の出土をみて墓壙と判明したものである。精査の結果、柱痕のように見えていた暗褐色部分の厚さは検出面から1㎝程度と薄く、それを境として埋土の状態が違うことがわかった。その埋土は、掘り起こした地山の土を人為的に埋め戻したにぶい黄褐色土であるが、断面図を作成した地点ではほぼ中央から縦に二分された。一度、墓全体を埋め戻した後に何らかの理由で半分ほど掘り起こし、さらに埋めたのであろうか。

規模は、開口部が137×90㎝、底部が104×65㎝で、深さは最大で50㎝を測る。長軸方向は、Ｎ－26°－Ｅである。底面は平坦で、壁はわずかに外傾して立ち上がっている。出土した銭貨から、江戸時代の墓壙である。



第11図　2号平坦部 検出遺構

（3）3号平坦部検出遺構

3号平坦部は調査区中央部北寄り、自然の沢地形を利用する堀跡の間にあって、既述したとおり4号平坦部とともに館の主要部を構成するものと思われる。本平坦部北東側の最も標高が高い地点には、既に宅地が造成されている。北上用方向の南西側切岸は、傾斜角35°前後の急峻となっている。地山面の標高は40～42ｍで、調査前の状況は荒地・山林である。

3号柵列（第13図、写真図版7）

ⅢＥ0ｇ・0ｈ・0ｉ・0ｊ、ⅣＥ1ｊグリッドにわたって位置し、3号平坦部南側外縁からの距離は内側におよそ3ｍである。ⅢＥ0ｇ・0ｈグリッドでは、一部撹乱を受けている。本遺構の外側約60㎝には4号柵列があって、平坦部の北西側では途切れるものの、ともに緩く弧を描きながら外縁線にほぼ沿う形に巡

第12図　3号平坦部 遺構配置図

っている。２つの柵列間に重複がないため新旧関係は不明であるが、この柵列に一回の作り枠えがあることは明らかである。遺物は出土していない。本遺構の長さはおよそ13.3m、上幅は20～40cm、下幅は13～30cmである。埋土は炭化物粒を含む黒褐色土の単層、底面は柵木の柱痕と思われる痕跡等で凹凸が著しい。柱痕の径は15～25cm前後、底面からの深さは、深いもので10cm程度である。時期は城館期（16世紀代）である。

４号柵列（第13図、写真図版７）

ⅢＥ０ｈ・０ｉ・０ｊ、ⅣＥ１ｊグリッドにわたって位置し、平坦部南側外縁からの距離は約2.4mである。精査できた長さは、二箇所の攪乱を挟んでおよそ7.2m、上幅は10～22cm、下幅は5～13cmで、３号柵列よりも若干規模が小さめである。埋土の状況等は３号柵列と同様である。遺物は出土していない。時期は城館期（16世紀代）であるが、上述のとおり３号柵列との新旧関係は不明である。

８号土坑（第13図、写真図版７）

ⅣＦ２ｂ・３ｂグリッドにまたがって位置し、北側で10号溝跡と重複関係にある。検出段階では新旧関係は掴めなかった。開口部の規模は135×44cmの隅丸長方形で、深さは最大で10cm、長軸方向はＮ－65°－Ｅである。埋土は粗砂や小礫を含む褐色土の単層で、断面形は浅皿状を呈している。遺物は出土しておらず、時期や用途等は不明である。

９号土坑（第13図、写真図版７）

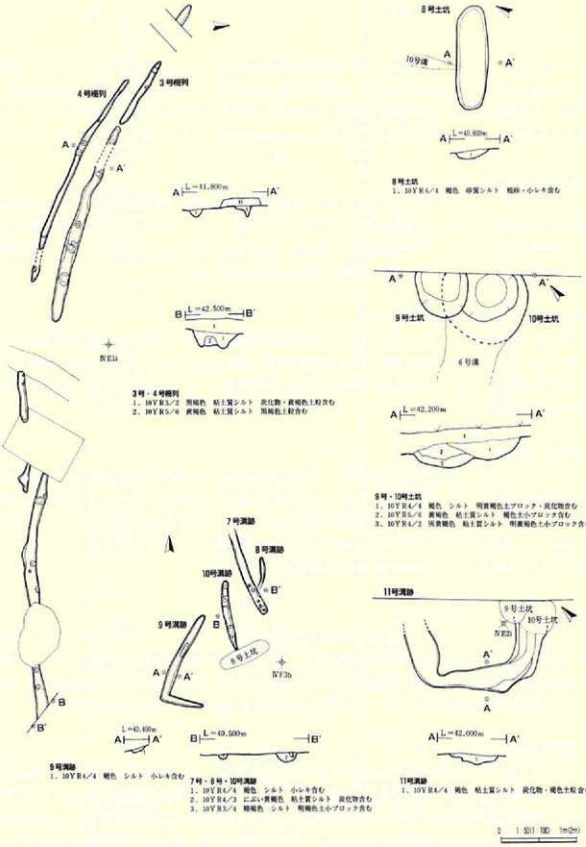
ⅣＥ１ｈ・２ｈグリッドにまたがって位置し、遺構北東側は調査区外に延びている。10号土坑・11号溝跡と重複関係にあるが、いずれの遺構よりも旧い。推定される規模は、開口部径が約70cm、底部径が約50cmで、平面形は円形もしくは楕円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最大で33cmである。埋土は上位が黄褐色土、下位が地山ブロックを含む灰黄褐色土からなる自然堆積層である。遺物は出土していないが、埋土の状況と重複関係から、縄文時代の土坑である可能性がある。

10号土坑（第13図、写真図版７）

ⅣＥ１ｈグリッドに位置し、これも遺構北東側は調査区外にある。重複関係は、11号溝跡より旧く９号土坑より新しい。規模は、推定開口部径が約100cm前後、底部径は40cmである。平面形は円形と思われる。検出面からの深さは27cmである。埋土は炭化物を含む褐色土の単層で、自然堆積と思われる。遺物は出土していない。詳細な時期等は不明であるが、９号土坑との重複関係から縄文時代以降に属するものである。

７号溝跡（第13図、写真図版８）

ⅣＦ３ｂグリッドに位置し、本遺構より新しい８号溝跡と重複している。遺構は、直線状に北側に延びているが、平坦部の外縁に至る前に消滅する。遺構自体が削られたものか、斜面の崩落等によるものかは不明である。精査した長さはおよそ2.5m、上幅は16～21cm、下幅は16cm前後、深さは22cmである。断面形は皿状で、底面には数個の凹凸が観察された。埋土は、炭化物粒を含むにぶい黄褐色土の単層で、遺物は出土していない。本遺構は３号あるいは４号柵列の続きになる可能性もあるが、明瞭でないことから溝跡として報告した。時期は不明である。



第13図　3号平坦部 検出遺構

8号溝跡（第13図、写真図版８）

ⅣＦ３ｂグリッドに位置する。７号溝跡と重複しているが本遺構が新しい。遺構は緩く弧を描いている。長さは約100cm、上幅は８～13cm、下幅は４～７cm、最大の深さは6.5cmである。埋土は、地山ブロックを含む暗褐色土の単層で、遺物は出土していない。時期は、７号溝跡が城館期に属すると仮定すれば、重複関係から中世以降となるが、詳細な時期は不明である。

9号溝跡（第13図、写真図版８）

ⅣＦ２ｂ・３ｂグリッド、８号土坑の西側に位置する。重複は認められない。遺構は途中からほぼ直角に屈曲している。それからは平坦部北西側の外縁に沿っていることから、柵列の続きの可能性があるが不明瞭なため溝跡とした。総長はおよそ3.3m、上幅は10～27cm、下幅は５～15cm、深さは15cm前後である。断面形は逆台形状、底面は概ね平坦である。明瞭な柵木痕は認められなかった。埋土は小礫を含む褐色土の単層で、遺物は出土していない。詳細な時期は不明である。

10号溝跡（第13図、写真図版８）

ⅣＦ３ｂグリッドに位置し、南端部で８号土坑と重複している。既述のとおり、新旧関係は不明である。遺構はわずかに弧を描きながら南北方向に延びている。規模は、長さ約1.8m、上幅５～19cm、下幅３～13cm、深さは最大で20cmである。埋土は小礫を含む褐色土の単層で、遺物は出土しなかった。底面には、柵木の柱痕様の窪みが認められることから、３号あるいは４号柵列の北側に続く柵列の一部である可能性がある。このことから、時期は城館期（16世紀代）に属する可能性がある。

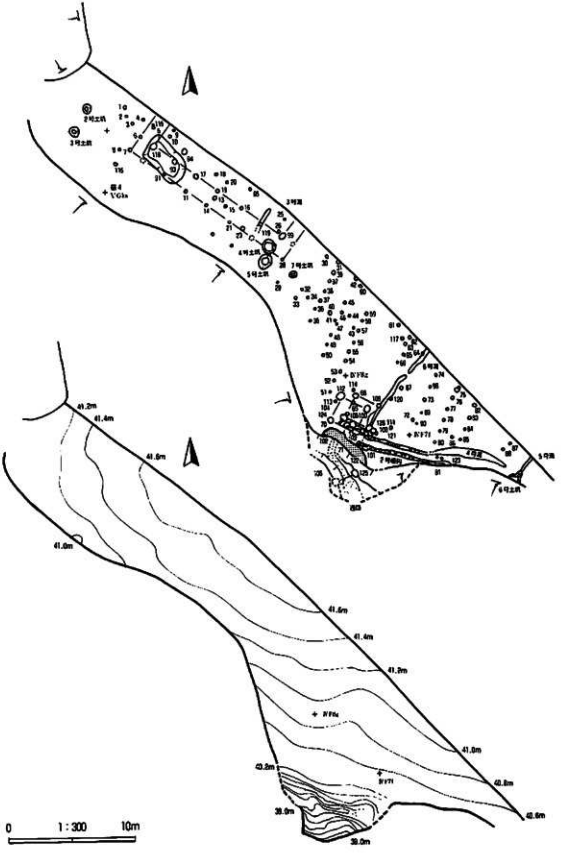
11号溝跡（第13図、写真図版８）

ⅣＥ１ｈ・１ｉ・２ｉグリッドにまたがって位置し、北東側は調査区外に延びている。９号・10号土坑との重複関係は既述のとおりであるが、この二つの土坑の断面図に本遺構の埋土は表れていない。このこととそれぞれの埋土の状況から、本溝跡は10号土坑と同一の遺構である可能性がある。ここではそれぞれ単独の遺構として報告した。

規模は一辺が3.5m前後の方形、上幅は34～75cm、下幅は28～70cm、深さは最大14cmを測る。断面形は浅皿状で、壁は緩く立ち上がり底面はわずかに凹凸を有する。埋土は炭化物を含む褐色土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

（４）４号平坦部検出遺構

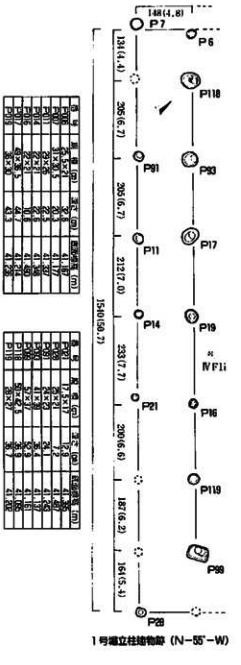
４号平坦部は調査区中央部の北側、４号堀跡と５号堀跡の間にある。掘立柱建物や数期にわたる門跡などの主要な遺構が検出されており、このことから本平坦部は３号平坦部とともに館の中枢として機能していたものと思われる。５号堀跡は、調査区外に僅かに痕跡を残す土塁とともに南西側に延びるが、いずれも北から東側にかけては畑地造成の際に消滅したらしい。南西側に向く切岸は、最大傾斜角30°の急崖となっている。平坦部地山面の標高は40.2～41.6m、門跡周辺のそれは38～40mである。調査前の状況は畑地である。なお、この平坦部外縁の中央付近は、等高線のあり方から地盤崩落しているものと思われるが、それがいつの時点かまた、自然に崩落したものか、人為的なものかは不明である。



第14図　4号平坦部 遺構配置図

1号掘立柱建物（第15図、写真図版9）

ⅣF9h・0g・0h・0i、VF1i・1jグリッドにわたって位置する。今回調査できたのは建物南西側の一部で、そのほとんどは北東側の調査区外に存在する。確認できた規模は、桁行8間（総長15.40m）、梁間1間（庇部分1.48m）の南東－北西棟建物で、軸方向はN-55°-Wである。平面形式は桁行6間、梁間1＋α間の身舎の四面に庇を持つ建物と思われる。桁行の柱間寸法は2.05m（6.7尺）が多用されるが、P119～P99の1.87m（6.2尺）、P19～P16の2.33m（7.7尺）などと寸法差がみられる。使用した柱穴は14個である。そのうち、柱痕が確認されたものはP188・P93・P17・P19・P16・P99の6個で、P118の底面には礫石が据えられていた。他に遺物は出土していない。この建物規模や周辺に存在する門跡・柵列などの遺構の性格から考えて、本遺構は城館期（16世紀代）の主要建物であると考えられる。



1号門跡（第17図、写真図版9）

4号平坦部南側、南西に張り出す外縁部のⅣF7f・7gグリッドに位置する。他遺構との重複はP103とP106で認められるが、P103が切られている。遺構は本柱4本から構成され、棟方向はN-30°-Eを示す。柱間寸法は2.0（6.6尺）－2.2m（7.2尺）を測り、僅かに東西方向の柱間が長い。遺構を構成する4個の柱穴にはいずれも柱痕が確認でき、その径は16～22cmである。掘り方は径50～70cm、深さ50～68cmの規模を持ち、南西側のP70・P103の底面には礫石が据えられている。遺物は出土しなかった。詳しくは後述するが、本遺構とその南西に広がる整地層・通路跡そして2号柵列は、その位置関係から同時期に存在した一連の出入り口施設と考えられる。時期は城館期（16世紀代）である。

2号門跡（第18図、写真図版9）

1号門跡と同様、ⅣF7f・7gグリッドに位置している。他遺構との重複関係であるが、P109・P126が6号溝跡に切られているほか、柱穴同士の切り合いが認められたが新旧関係は掴めなかった。これも本柱4本から構成されるもので、棟方向はN-29°-E、柱間寸法は2.0（6.6尺）～2.15m（7.0尺）である。柱痕が確認できたものはP68とP104で、径は18～23cm、掘り方の規模は32～63cm、深さ28～43cmである。なお、P104は柱材の抜き取り後に粘土が埋め戻されている様相を呈している。底面に礫石を有するものはP126のみである。いずれの柱穴から

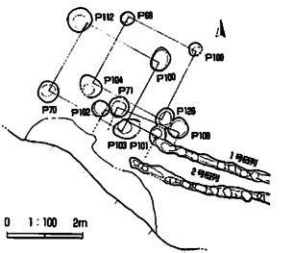
0　1:100　2m

第15図　4号平坦部 検出遺構（1）

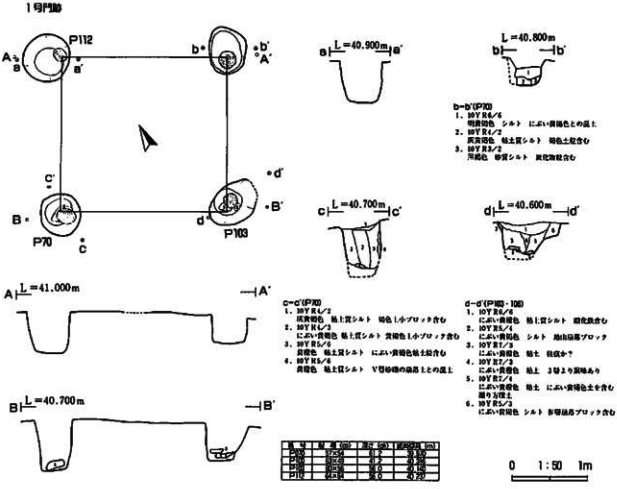
も遺物は出土していない。1号門跡との新旧関係は、直接に切り合う柱穴が存在しないため不明であるが、城館期（16世紀代）において作り替えられたものであることは明らかである。また、本遺構には位置的に1号棚列が取り付くものと思われるが、これについても後述することとする。

3号門跡（第18図、写真図版9）

ⅣF7f・7gグリッドにまたがって位置し、門跡等を構成する柱穴群内の2個の柱穴を使用している。他遺構との重複関係はP71とP102、P108とP126において認められるが、新旧関係は掴めなかった。元々本柱2本から構成されるものか、本来は4本で構成されるものが地盤の崩落等によって2個の柱穴しか存在

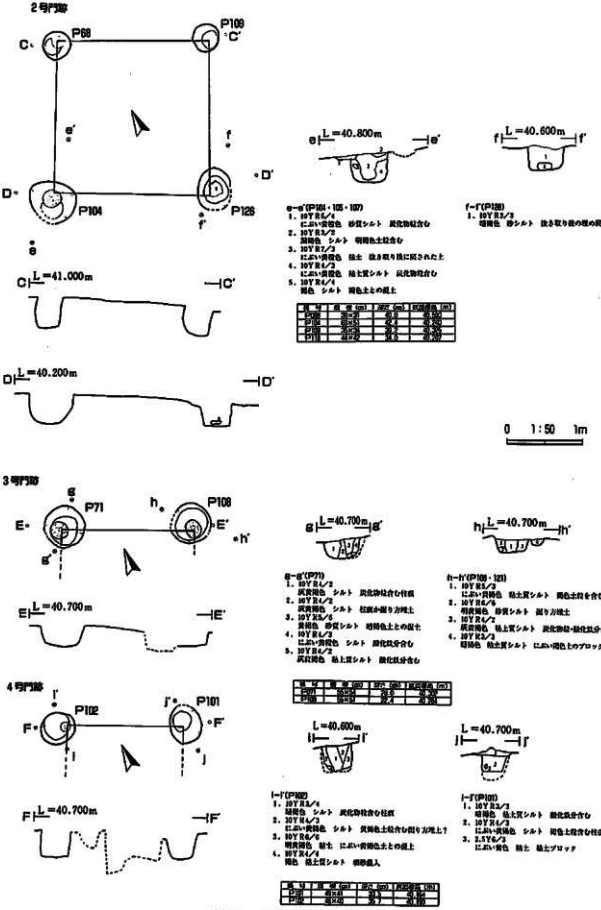


第16図　門跡周辺図



柱穴	平面形	規模（cm）	深さ（cm）	標高値（m）
P70	円形	40×36	81	41.100
P103	円形	50×50	67	41.000
P102	円形	50×50	81	41.100
P112	楕円形	44×34	84	41.297

第17図　4号平坦部 検出遺構 (2)



e-e'(P104・105・107)
1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト 炭化物粒含む
2. 10YR5/3 黒褐色 シルト 明褐色土粒含む
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土 焼き焼き粒に混ざれた土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 炭化物粒含む
5. 10YR5/4 褐色 シルト 褐色土との混土

層	名	層 厚(cm)	深さ(cm)	標高値(m)
P104	第2層	20.0	40.0	40.800
P105	第2層	20.0	40.0	40.800
P107	第2層	20.0	40.0	40.800
P108	第2層	20.0	40.0	40.800

f-f'(P126)
1. 10YR5/3 褐褐色 砂シルト 焼き取り後の埋め戻し

g-g'(P71)
1. 10YR5/4 灰褐色 シルト 炭化物粒含む柱痕
2. 10YR4/3 黒褐色 シルト 柱痕が混り方埋土
3. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 明褐色土との混土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 腐化物含む
5. 10YR5/4 灰白褐色 粘土質シルト 腐化粒含む

h-h'(P108・121)
1. 10YR5/2 にぶい黄褐色 粘土質シルト 褐色土粒を含む柱痕
2. 10YR5/6 明褐褐色 砂質シルト 混り方埋土
3. 10YR4/6 灰黄褐色 粘土質シルト 炭化物粒・腐化粒含む
4. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト にぶい褐色土のブロック含む

層	名	層 厚(cm)	深さ(cm)	標高値(m)
P71	第2層	20.0	40.0	40.700
P108	第2層	20.0	40.0	40.700

I-I'(P102)
1. 10YR5/4 褐褐色 シルト 炭化物粒含む柱痕
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 黄褐色土粒含む混り方埋土?
3. 10YR6/6 明黄褐色 粘土 にぶい黄褐色土との混土
4. 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 焼粒混入

J-J'(P101)
1. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 腐化粒含む
2. 10YR5/4 にぶい褐色 シルト 褐色土粒含む柱痕
3. 2.5YR6/3 にぶい黄色 粘土 粘土ブロック

層	名	層 厚(cm)	深さ(cm)	標高値(m)
P102	第2層	20.0	40.0	40.700
P101	第2層	20.0	40.0	40.700

第18図 4号平坦部 検出遺構(3)

しないのかは不明である。入口を斜面側とした場合の棟方向はN-19°-E、柱間寸法は1.75m（5.8尺）である。いずれの柱穴にも柱痕が確認できその径は20～24cm、掘り方の規模は径53cm、深さ16～29cmである。いずれの柱穴からも遺物は出土していない。時期は城館期（16世紀代）と思われるが、構造を含めて他の周辺にある門跡との関係は不明である。

4号門跡（第18図、写真図版9）

3号門跡の南西側に隣接している。遺構間の重複はP71とP102、P101とP126、P101と1号柵列において認められるが、新旧関係は確認できなかった。3号門跡同様、本柱の本数については明らかでない。本遺構の棟方向は1号・2号門跡とほぼ平行し、柱穴間の寸法は1.53m（5.0尺）である。掘り方の規模は径40cm前後、深さはいずれも32cmである。遺物は出土していないが、時期は城館期（16世紀代）と思われる。

3号・4号門跡が確実に本柱2本構造の門であるとすれば、全部で都合3回の作り替えがあったことが考えられる。3号・4号門跡が2本構造なのか4本構造なのか、また柱穴間の新旧関係を確実に把握すれば、この城館の門跡の変遷を明らかに出来たのかもしれない。柱穴間の重複はほんの僅かではあったが、新旧関係を十分に把握できなかったことが今更ながら悔やまれる。

1号通路跡（第19・20図、写真図版10）

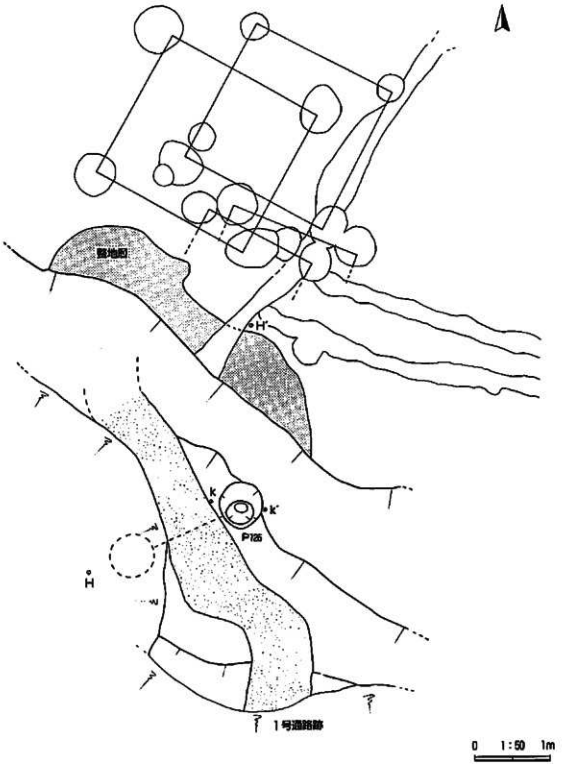
4号平坦部南側の外縁から切岸にかけて、ⅣF6e・6f・6gグリッドに位置する。門跡群の南西側にある整地層に続く通路跡で、東にある4号堀跡側から主郭への登り口と思われる。この通路は、切岸の急斜面を緩やかに上がれるように作事され、1号門跡の正面に向かって整地層部分に延びている。通路面はV層の砂礫層が踏ふしめられて堅くなっているが、通路中央部は溝鉢形にわずかに盛り上がっている。規模は、精査できた部分で長さ5.0m弱、幅は68～94cmである。

P125はこの通路跡のすぐ脇にある柱穴で、通路にかかる本柱2本の門を構成するもののの一つと思われる。これと対になる柱穴は、斜面の地盤崩落によって失われた可能性が高い。柱穴はV層下の礫層を掘り込んでおり、埋土は炭化物粒を含む褐色土の単層である。規模は直径が58cm、検出面からの深さは70cmである。

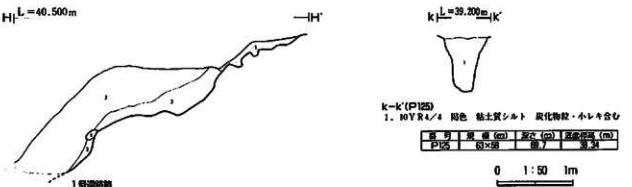
整地層は長さ4.3m、幅50～80cmの規模で平坦部の縁辺から斜面部に沿って細長く広がる。整地に使われた土はにぶい黄褐色と灰黄褐色の混合土で、厚さは10～20cmである。

1号柵列（第21図、写真図版10）

ⅣF6e・6f・7e・7fグリッドにわたって位置し、門跡を構成する柱穴群の南東側外縁付近にある。外縁部からの距離は内側におよそ2.5mである。本遺構の東側で4号溝跡と重複していたと思われるが、新旧は明瞭でない。遺構の西側ではP101とも重複するが、新旧関係が掴めなかった。本遺構の外側30～60cmには2号柵列があり、2列とも平行して直線状に延びている。これらもまた、柵列間に重複がないため新旧関係は不明である。埋土は炭化物粒を含むにぶい褐色土で、遺物は出土しなかった。規模は、長さ5.25m、上幅20～27cm、下幅10～15cmで、底面には柵木の柱痕が多数認められ、凹凸が著しい。柱痕の径は10～20cm、底面からの深さは深いもので10cm程度である。既述のように、本遺構は2号門跡に取り付く柵列と考えられ、時期は城館期（16世紀代）である。



第19図　4号平坦部 検出遺構(4)



第20図　4号平坦部 検出遺構 (5)

2号棚列（第21図、写真図版10）

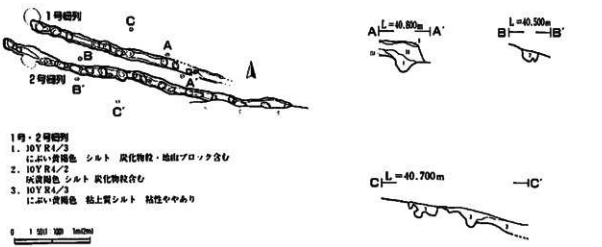
位置は既述のとおりである。P122と重複しているが、新旧関係は掴めなかった。本遺構の東側は、平坦部縁辺付近の地盤崩落により失われているが、本来はこの平坦部の外縁に沿って全周していたものと思われる。規模は長さ約7.7m、上幅20～27cm、下幅10～15cmを測り、底面の状況、掘木柱痕の規模等は1号棚列と同様である。埋土は炭化物粒を含む灰褐色土の単層で、遺物は出土していない。門跡を構成する柱穴との位置関係から、本遺構は1号門跡に取り付く棚列と考えられる。時期は城館期（16世紀代）である。

2号土坑（第22図、写真図版10）

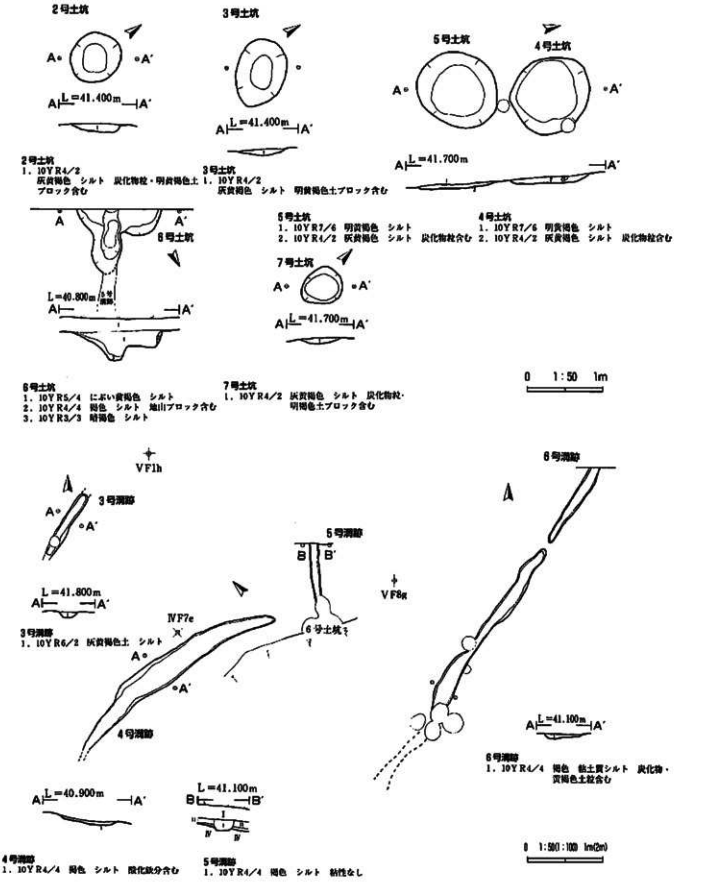
VG2aグリッド、3号土坑の北東約1.4mに位置する。遺構間の重複はない。平面形は円形で、規模は開口部径が63×70cm、底部径が30×38cm、検出面からの深さは12cmである。埋土は炭化物粒を含む灰黄褐色土の単層で、自然堆積である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

3号土坑（第22図、写真図版11）

VG1a・2aグリッドにまたがって位置する。上述のとおり、2号土坑とは1.4mほどの距離がある。遺



第21図　4号平坦部 検出遺構 (6)



第22図　4号平坦部 検出遺構(7)

構間の重複はない。平面形は楕円形、規模は開口部径が65×93cm、底部径が27×44cm、検出面からの深さは9cmである。埋土は灰黄褐色土の単層で、自然堆積と思われる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

4号土坑（第22図、写真図版11）

ⅣF0hグリッド、5号土坑の北側20cmに位置する。P27と重複しているが、本遺構のほうが旧い。平面形は略円形で、規模は開口部径が97×109cm、底部径が78×81cm、検出面からの深さは6cmである。埋土は、灰黄褐色土に地山ブロックを含む自然堆積層である。遺物は出土していないが、規模・埋土の状況等から、縄文時代の土坑である可能性がある。

5号土坑（第22図、写真図版11）

ⅣF9h・0hグリッドにまたがってあり、4号土坑と隣接する。他遺構との重複はない。平面形は略円形で、規模は開口部径が97×112cm、底部径が65×69cm、検出面からの深さは、最大で9cmである。埋土は、炭化物を含む灰黄褐色土に地山ブロックが混じる自然堆積層である。遺物は出土していないが、規模・埋土の状況等から、縄文時代の土坑である可能性がある。

6号土坑（第22図、写真図版11）

4号平坦部南東端のⅣF6dグリッドに位置する。本遺構南東方向の切岸側にかけては、地盤崩落のため失われているものと思われる。北側から延びる5号溝跡と重複するが、埋土の状況から同一遺構の可能性もある。平面形は、北東側が溝状に張り出す不整形で中央部は一段深くなる。その部分の深さは39cmである。埋土は、にぶい黄褐色土を主体とし壁際に褐色の崩落土等を含む。自然堆積と思われる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

7号土坑（第22図、写真図版12）

ⅣF9g・9hグリッドにまたがってあり、本遺構の北西2mほどに4号・5号土坑がある。他遺構との重複はない。平面形は略円形で、規模は開口部径が50×58cm、底部径が35×45cm、検出面からの深さは最大で7cmである。埋土は、炭化物粒を含む灰黄褐色土の自然堆積層である。出土遺物はなく時期は不明である。

3号溝跡（第22図、写真図版12）

ⅣF0hグリッドに位置し、1号掘立柱建物を構成するP119と重複する。本遺構のほうが新しい。方向は北東－南西であるが、本来はその両方向に延びていたものと思われる。精査した長さは1.9m、上幅は25cm、下幅は16cm。検出面からの深さは最大で3cmと浅い。断面形は浅皿状で、底面は平坦である。埋土は灰黄褐色土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが縄館期よりは新しい溝である。

4号溝跡（第22図、写真図版12）

ⅣF6d・6e・6fグリッドにわたって位置し、地盤崩落後の現在の平坦部外縁線にほぼ平行している。5号溝跡・6号土坑との距離はおよそ1mで、重複については1号掘列で記載したとおりである。規模は、長さがおよそ3.2m、上幅が8～39cm、下幅が7～30cm、検出面からの深さは数cmである。埋土は褐色土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

5号溝跡（第22図、写真図版12）

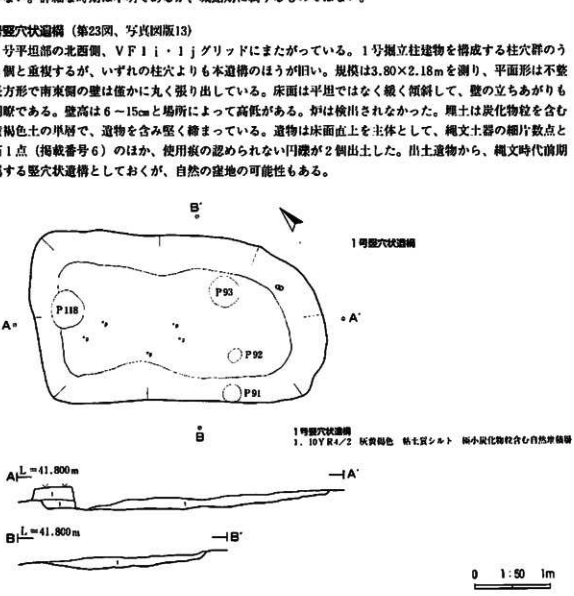
ⅣＦ６ｄグリッドに位置し、重複関係等は６号土坑の記載にあるとおりである。規模は、長さが1.5m、上幅が18～24cm、下幅が14～18cm、検出面からの深さは13cmである。埋土の観察から、本遺構は本来Ⅱ層上面で検出されるべきものである。埋土は褐色土の単層で、遺物は出土していない。時期は不明であるが、少なくとも城館期に属するものではない。

6号溝跡（第22図、写真図版13）

ⅣＦ７ｆ・８ｅ・８ｆグリッドにまたがって位置し、北東側は調査区外に延びている。門跡を構成する柱穴群と多数重複しているが、本遺構はそのいずれよりも新しい。規模は、長さが８ｍ弱、上幅が15～35cm、下幅が10～27cm、検出面からの深さは６～７cm程度である。埋土の観察から、本遺構は本来Ⅱ層上面で検出されるべきものであるが、地山面で確認し精査した。埋土は炭化物粒を含む褐色土の単層で、遺物は出土していない。詳細な時期は不明であるが、城館期に属するものではない。

1号竪穴状遺構（第23図、写真図版13）

４号平坦部の北西側、ＶＦＩｉ・１ｊグリッドにまたがっている。１号掘立柱建物を構成する柱穴群のうち３個と重複するが、いずれの柱穴よりも本遺構のほうが旧い。規模は3.80×2.18mを測り、平面形は不整な長方形で南東側の壁は僅かに丸く張り出している。床面は平坦ではなく緩く傾斜して、壁の立ちあがりも不明瞭である。壁高は６～15cmと場所によって高低がある。炉は検出されなかった。埋土は炭化物粒を含む灰黄褐色土の単層で、遺物を含み堅く締まっている。遺物は床面直上を主体として、縄文土器の細片数点と磨石１点（掲載番号６）のほか、使用痕の認められない円礫が２個出土した。出土遺物から、縄文時代前期に属する竪穴状遺構としておくが、自然の窪地の可能性もある。



第23図　４号平坦部 検出遺構 (B)

（5）5号平坦部検出状況

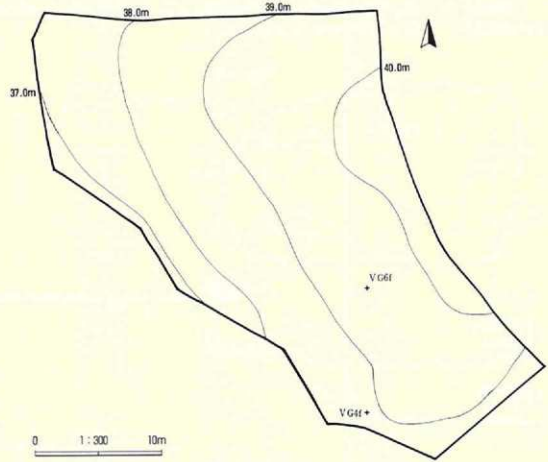
5号平坦部は、調査区最北部の西側に張り出す尾根上の緩斜面にあって、5号堀跡と平坦部北側の沢との間に位置する。西側に向く切岸は、傾斜角35°あまりの急崖となっているが、北側の沢にかけては比較的緩やかである。地山面の標高は37～40m前後と他の平坦部に比べて傾斜がきつい。調査前の状況は山林である。ここからは遺構が一切検出されておらず、遺物は縄文時代の土器やフレイク・チップ類が僅かに出土した程度である。遺構は確認されなかったが、城域としてはこの部分まで含めて考えたい。（第24図、写真図版14）

（6）6号平坦部検出遺構

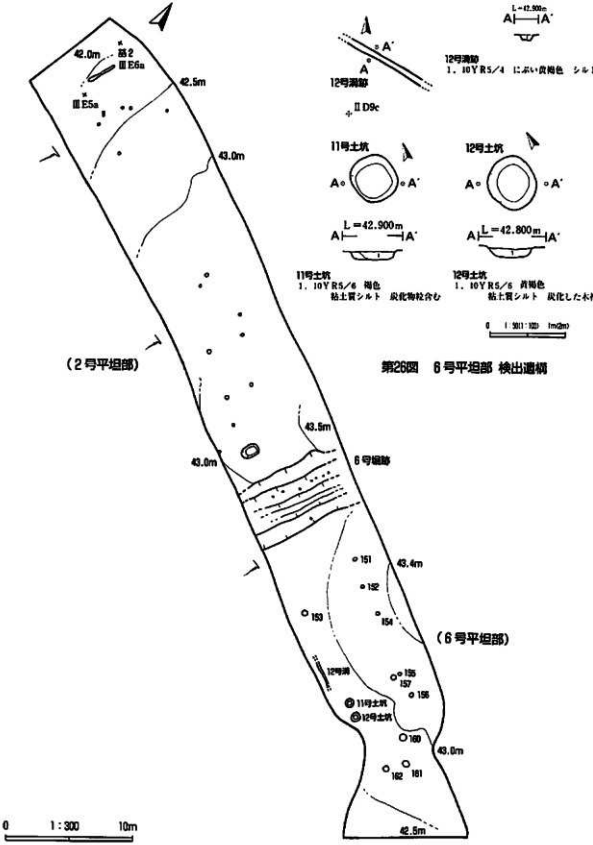
6号平坦部は調査区中央部の南東側、2号堀跡と6号堀跡の間にあって、2号平坦部のさらに一つ外側の曲輪を構成すると思われる。南西側に向く切岸は、2号平坦部と同様、急崖となっている。地山面の標高は42.5m～43.5mで、調査前の状況は水田である。

12号溝跡（第26図、写真図版15）

6号平坦部南東側の外縁部、ⅡＤ９ｂグリッドに位置し北西から南東方向に延びている。遺構間の重複はない。規模は長さが2.25m、上幅が20cm前後、下幅が15cm前後、検出面からの深さは最大で8cm程度である。底面は平坦で、構列にみられる柵木の痕跡は認められない。埋土はにぶい黄褐色土の単層で、遺物は出土しなかった。位置的には構列の可能性もあったが、柱痕が確認されなかったことから溝跡とした。



第24図　5号平坦部 等高線図



第26図 6号平坦部 検出遺構

第25図 6号平坦部 遺構配置図

11号土坑（第26図、写真図版15）

12号溝跡の南東およそ2m、ⅡD9aグリッドに位置する。12号土坑とは南東方向に50cmの距離がある。平面形は円形、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部径が57×64cm、底部径が43×45cmで、検出面からの深さは11cmを測る。埋土は炭化物粒を含む黄褐色土の単層で、遺物は出土しなかった。時期は不明である。

12号土坑（第26図、写真図版15）

ⅡD9bグリッドにあり、他の遺構との位置関係は上述のとおりである。平面形は円形、断面形は浅皿状である。規模は開口部径が65×73cm、底部径が44×49cm、検出面からの深さは10cmである。埋土は、炭化した木材片を含む黄褐色土の単層で、自然堆積と思われる。時期は不明である。

（7）堀跡

この猪岡館跡の曲輪を区画する堀跡は、全部で6条確認された。調査の結果、1号～4号堀跡は自然地形の沢を利用した空堀、5号・6号堀跡は曲輪をさらに小さく区切る普請された空堀であることが明らかとなった。既述のとおり、前者については断面観察と写真撮影のみの精査しか行っていないが、後者では5号堀跡は断面図の図化まで、6号堀跡は完掘後、平・断面図の図化までを行った。

1号堀跡（写真図版16）

1号平坦部の北東側にあり、他の沢を利用した堀跡とは方向や斜面の傾斜が緩やかな点で異なる。土層からは普請・作事等の痕跡は認められない。長さはおよそ50m、上幅は約20mである。周辺の地形から見て、自然地形を使った堀というよりは、平坦地縁辺の自然崩落による凹部である可能性があり、堀跡としたのは不適当だったかもしれない。

2号堀跡（写真図版16）

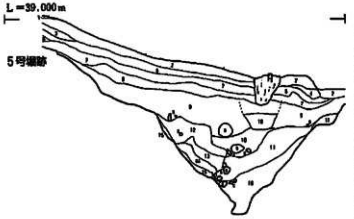
1号平坦部と6号平坦部の間にある。北上川に流れ込んでいた沢を利用した自然の竪堀で、現在でも僅かな流水・湧水がみられる。これも土層からは普請・作事等の痕跡は認められない。地形図上での長さは約60m、上幅は10～50mで、南側に向かって大きく開いている。この堀跡の北側はどこまで続くものかは不明である。

3号堀跡（写真図版17）

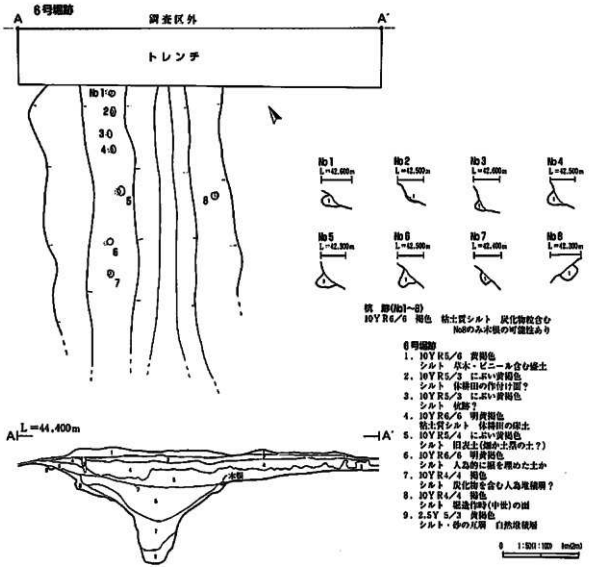
2号平坦部と3号平坦部の間にあって、北北東から南南西方向に緩く弧状に抜ける自然の竪堀である。この堀跡は北側に細く延び、その西側の主郭側には帯状に土塁の痕跡が残っているが、調査区内においては、普請・作事等の痕跡は認められなかった。地形図上での長さはおよそ110m、上幅は5～40mである。土塁は、調査区外の宅地裏に長さ35mにわたって観察される。

4号堀跡（写真図版18）

3号平坦部と4号平坦部間にある竪堀で、現在は排水場として使われている。主郭となるその二つの平坦部を画する堀跡として調査したが、他の自然地形利用の堀と比べて規模が小さく、また北東方向への繋がりも不明瞭なため、主郭を二分する堀となるかは不明である。調査区内においては、普請・作事等の痕跡は認



5号堰跡
1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト・砂礫の混土 最近の盛土
2. 10YR3/3 暗褐色 シルト・砂礫の混土 現表土
3. 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト
4. 10YR5/6 黄褐色 シルト・砂の混土 盛土と思われる
5. 10YR4/6 褐色 シルト・砂の混土 炭化物粒含む
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト・砂の混土 粘性ややあり
7. 10YR5/6 黄褐色 シルト・砂の混土 4層に似る盛土
8. 10YR5/6 黄褐色 砂質土 粘性なし
9. 10YR4/4 褐色 シルト・砂礫の混土 円レキ・角レキ含む
10. 10YR4/6 褐色 砂礫層 下位に円レキ・角レキ集中する
11. 10YR4/6 褐色 砂礫層 砂層のブロック・レキ多く含む
12. 10YR5/6 黄褐色 シルト・細砂の混土 円レキ含む
13. 10YR5/6 黄褐色 砂質土 円レキ・角レキ含む
14. 10YR3/2 黒褐色 シルト 礫文土器出土
15. 10YR4/4 褐色 砂質土 礫文土器出土
16. 10YR5/6 黄褐色 砂礫層 円レキ・角レキ多数含む人為堆積か？
17. 10YR4/4 褐色 砂質土 自然堆積層
18. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト・砂の混土 新期土坑埋土？



柵 跡(No1~8)
10YR6/6 褐色 粘土質シルト 炭化物粒含む
No8のみ水抜の可能性あり

6号堰跡
1. 10YR5/6 黄褐色
シルト 水木・ビニール含む盛土
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色
シルト 休耕田の作付け面？
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色
シルト 攪乱？
4. 10YR5/6 明黄褐色
粘土質シルト 休耕前の耕土
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色
シルト 旧表土(畑か水田の土？)
6. 10YR6/6 明黄褐色
シルト 人為的に盛を埋めた土か
7. 10YR4/4 褐色
シルト 炭化物を含む人為堆積層？
8. 10YR4/4 褐色
シルト 堰造作時(中世)の面
9. 2.5Y 5/3 黄褐色
シルト・砂の互層 自然堆積層

0 1:200(1:100) 4m(2m)

第27図 5号・6号堰跡

められなかった。地形図上での長さはおよそ45m、上幅は5～25mである。

5号堀跡（第27図、写真図版18）

4号平坦部と5号平坦部の間にあって、北北東から南南西方向に延びる竪堀である。調査は、調査区境に入れた幅1.5m余りのトレンチ調査のみである。北側の調査区外にはその東側に土塁状の高まりが観察され、当時は堀と土塁によって曲輪が画されていたものと思われる。この堀跡は次第に緩く東側に折れて3号堀跡に続き、70×120mほどの広さを有する館の主体部分を巡っていたのであろう。規模は、現在残存する長さがおよそ40m、断面観察地点での上幅は9m弱、垂直高は4mを僅かに越える。埋土は、盛土～旧表土を除いて礫を含む褐色～黄褐色土を主体とし、最下部には人為的に入れられたと思われる砂礫混じりの黄褐色土が堆積している。断面はV字状を呈する、いわゆる薬研堀である。出土遺物は、埋土中位の壁際から出土した縄文土器片数点のみである。本遺構は、城館期に普請された空堀である。

6号堀跡（第27図、写真図版19）

2号平坦部と6号平坦部の間にあって、両平坦部をほぼ真ん中で区切る竪堀である。方向は北北東から南南西方向で、切岸まで大きく掘り抜かれている。調査は、調査区境に幅1.5m余りのトレンチを入れて土層を確認後に完掘したが、精査できた長さは9mほどである。この堀跡の北東約35m付近の調査区外には、現在墓地となっている当時の土塁の痕跡が確認できる。これは、本遺構の北西外縁に取り付いてともに北側に延び、3号堀跡に折れて繋がるものであろう。規模は、断面観察地点での上幅が約10m、垂直高は5.3mを測り、断面形は薬研堀状である。埋土は、上位が数回にわたる水田造成に伴う盛土、中位～下位が土塁を壊して人為的に埋めたと思われる褐色土と明黄褐色土からなる。最下部は自然堆積のシルト質土と砂の互層である。なお、本遺構北西側壁の斜面の中ほどには7個の、反対側には1個の杭跡が確認された。いずれも直径が20cm程度のもので、堀の内側に傾けて杭が打ち込まれていたものと思われる。杭跡が主郭側の北西壁に多く並んでいる状況から、そちら側の防御を固める意味があったものと考えられる。一応、ここでは乱杭（堀底にある打ち込み杭）の一種として報告する。

出土遺物は、埋土中位から出土した縄文時代の土器片1点と磨石（掲載番号7）1点だけで、城館期に属するものは出土しなかったが、この堀も城館期に普請された空堀である。

2．出土遺物

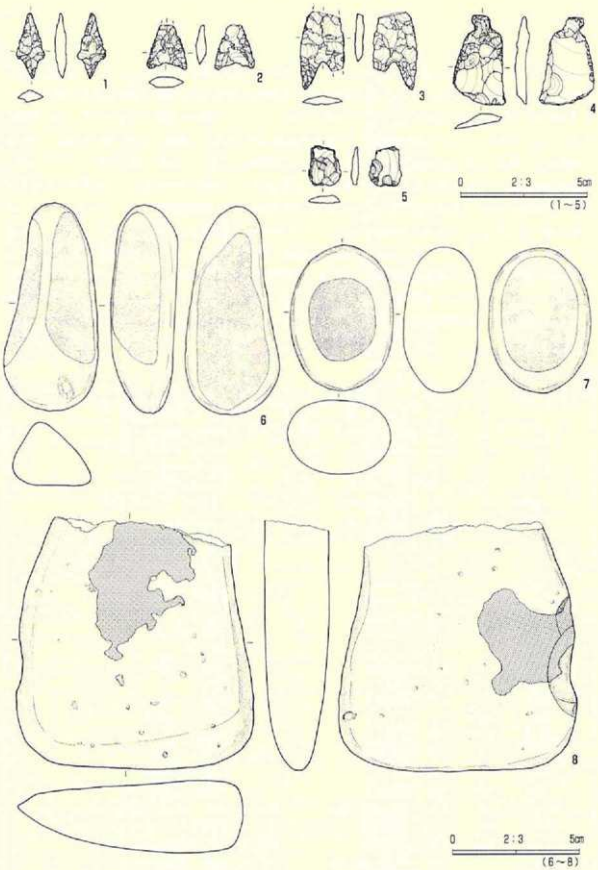
今回の調査で出土した遺物は収納用小コンテナ（45×35×9cm）1箱弱で、そのほとんどは遺構外から出土した。種類は、縄文土器・石器類、陶磁器、金属製品などがあるが、城館期に属する可能性のある遺物は陶磁器1点（遺物番号26）のみである。遺物の内容は、縄文土器は50点余り重量620g、石器類は剥片類では掲載した5点のほか、フレイク・チップが重量約700g、礫石器は掲載した3点、陶磁器5点余り、金属製品では角釘1点と銭貨（寛永通寶）8枚である。本報告書には、地文のみで時期が明瞭でない縄文土器の破片や、フレイク・チップを除くすべてを掲載した。以下に、種類ごとに詳細を記述する。

1～5は剥片土器で、1は完形の有茎凸基鏃でP112から出土したもの。2・3は凹基鏃でいずれも先端を欠き、3は基部の抉りが深い。4は緑泥石製の完形品、5は黒曜石製の細部加工剥片と思われる。6～8

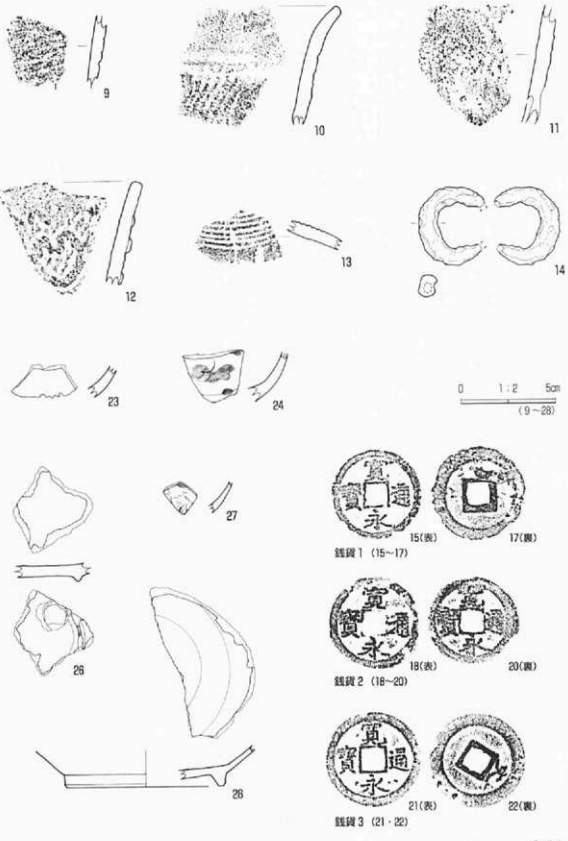
は礫石器で、6は1号竪穴状遺構の床面から出土した3面に使用痕が認められる磨石、7は6号堀跡の埋土中位から出土した磨石である。8はP126の底面にあった礫石で表裏に焼け焦げが観察される。縄文時代の台石などからの転用かとも思われる。9～13は縄文土器で、12までは深鉢の胴部や口縁部破片、13は壺類の肩部と思われる破片である。10は口唇部にごく僅かな指頭の押圧があり、頸部には浅い沈線が巡る。器形から中期末葉～後期前葉か。12は粘土紐の貼付けによる山形の隆帯を有することから前期中葉、13は平行沈線・刺突などから晩期後半に比定される。9・11は器面の摩滅が著しく時期が不明である。14はP66の底面から出土した現状に変形している鉄釘である。15～22は1号墓壙底面出土の副葬品である。15～17（銭貨1）の3枚、18～20（銭貨2）の3枚、21・22（銭貨3）の2枚がそれぞれ接合した状態で出土した。銭貨3の22は「文寛永」である。なおこれらとともに、底面から副葬品であったと思われる漆器の漆皮膜が出土している。23～28は陶磁器で、23は肥前産陶器の呉器手碗、24は肥前産の磁器碗、25は肥前産磁器と思われるが器種が不明である（以上大鋸編年Ⅳ期以降）。26は美濃産の志野皿で底部にハリ支え痕を有する。年代は16世紀末から17世紀初めで、唯一城館期に近い年代を持つものである。27は19世紀以降の染付。28は肥前産磁器皿で見込蛇の目釉剝ぎである。（第28・29図、写真図版20・21）

表2　出土遺物観察表

番号	出土地点	種別	層位	法量（cm）	重量(g)	文様・石質・産地・年代など	写図
1	P112	石臼	埋上	長さ3.6　幅1.1　厚3.0.4	0.84	有茎、赤色頁岩(奥羽山脈)	20
2	NE2i	石鏃	不明	長さ(1.7)　幅1.6　厚3.0.4	0.83	無茎凹基、頁岩(奥羽山脈)	20
3	NF9i	石鏃	Ⅱ層	長さ(3.1)　幅1.7　厚3.0.4	1.51	無茎凹基、頁岩(奥羽山脈)	20
4	VG7j	石匙	Ⅱ層	長さ3.5　幅2.1　厚3.0.6	3.53	縦型、頁岩(奥羽山脈)	20
5	VG6g	剝片加工	Ⅱ層下	長さ1.6　幅1.3　厚3.0.3	0.66	黒曜石製(産地不明)	20
6	1号竪穴状	磨石	床直	長さ16.5　幅7.5　厚3.5.0	747.4	3面に磨面、安山岩(奥羽山脈)	20
7	6号堀跡	磨石	黒褐下	長さ11.5　幅8.1　厚3.5.8	773.2	安山岩(奥羽山脈)	20
8	P126	礫石	底面	長さ19.8　幅18.8　厚3.5.6	3.284kg	台石の転用？表裏にコゲ付着、安山岩(奥羽山脈)	20
9	NF6f	縄文土器	Ⅱ層			深鉢胴部、沙粒含む胎土、器面摩滅	20
10	NF6f	縄文土器	Ⅱ層			深鉢口縁部、L R横走、口唇部押圧、頸部狭い沈線	20
11	トレンチ8	縄文土器	表土下			深鉢胴部、器面摩滅著しい	20
12	NF9h	縄文土器	不明			深鉢口縁部、鋸歯状に粘土紐貼付け、地文不明	20
13	VG7f	縄文土器	Ⅱ層			壺肩部？刺突、平行沈線	20
14	P66	鉄釘	底面		12.36	環状に屈曲	20
15	1号墓壙	銭貨1	底面	直径2.3		8枚のうち3枚接合	21
16	1号墓壙	銭貨1	底面	直径2.3		3枚接合	21
17	1号墓壙	銭貨1	底面	直径2.3	7.68	3枚接合、以上銭貨1	21
18	1号墓壙	銭貨2	底面			8枚のうち3枚接合	21
19	1号墓壙	銭貨2	底面	直径2.3		3枚接合	21
20	1号墓壙	銭貨2	底面	直径2.4	6.86	3枚接合、以上銭貨2	21
21	1号墓壙	銭貨3	底面			8枚のうち2枚接合	21
22	1号墓壙	銭貨3	底面	直径2.4	4.58	2枚接合、以上銭貨3	21
23	BD5i	陶器	Ⅱ埋上	製作地：肥前(唐津)	器種：碗	透明釉、呉器手形、大鋸Ⅳ期(1690～1780)以降	21
24	BE5a	磁器	Ⅰ～Ⅱ	製作地：肥前	器種：碗	染付(草花文)、大鋸Ⅳ期(1690～1780)以降	21
25	VG6h	陶器	Ⅱ層下	製作地：肥前	器種：碗	染付、大鋸Ⅳ期(1690～1780)以降	21
26	BA区	陶器	表採	製作地：美濃(志野)	器種：皿	長石釉、底部にハリ支え痕、16C末～17C初	21
27	不明	磁器	表採	製作地不明	器種：碗	コバルト発色、19C以降	21
28	四壁区北側	磁器	表採	製作地：肥前	器種：皿	透明釉、見込み蛇の目釉剝ぎ、19C以降	21



第28図　出土遺物(1)


9
10
11
12
13
14
23
24
0 1:2 5cm
(9~28)
27
26
28
15(表)
17(裏)
銭貨1 (15~17)
18(表)
20(裏)
銭貨2 (18~20)
21(表)
22(裏)
銭貨3 (21・22)
S=1/1

第29図　出土遺物(2)

Ⅴ まとめ

1．遺構と遺物

今回の発掘調査において得られた成果は、遺構についてはP16の一覧に示したとおりで、城館期に属する遺構は６つの平坦部と掘立柱建物１棟・柵列５条・門跡４棟・通路跡１箇所・堀跡２条（自然地形の沢を除く）である。その他には、縄文時代では竪穴状遺構が１棟、近世では墓壙１基のほか、時期不明の土坑12基・柱穴132基・溝跡12条が確認された。

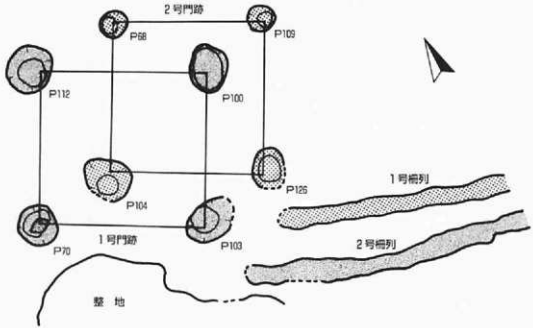
出土した遺物は、縄文土器（中期・後期・晩期）・石器（石匙・磨石等）、フレイク・チップ類、陶磁器、金属製品（角釘・銭貨）であるが、城館期に属するものは、美濃産の志野皿１点のみである。

今回の調査範囲は、猪岡館の城域全体から見ると、各曲輪の平坦地の一部と北上川に向く切岸の一部分だけという限られたものであった。しかしそれ故に、城館の構造上ある程度予測可能な遺構、例えば門跡・柵列・通路跡といった一連の遺構が確認されたことや、この館に関する文献が比較的豊富に存在したことなどから、城館全体の調査には全く及ばないものの、一定以上の成果は挙げられたと思っている。ここでは、猪岡館跡が機能していた時代の遺構について述べ、その後に城館構造、城域について若干の検討を加えてみたい。

まず、第４号平坦部の縁辺に確認された門跡と柵列、通路跡についてであるが、第30図に紫桃氏が作成した猪岡城の略図を『史料仙台領内古城・館』第一巻より転載した。本丸付近の略図であるが、既述のように西側中央の内側に入り込む部分に大手門とあり、調査ではまさにこの箇所に上記の遺構群が確認された。第31図に示したように、門跡と柵列には作り替えがあって２組のセットで存在していることがわかる。２つの門跡を構成する柱穴間に重複が無く、明確な新旧関係は不明であるが、門跡西側にある整地された範囲から１号門跡と２号柵列のセットのほうが新しい施設である可能性が高い。さらにこの西側に続く通路跡の脇には深く大きな柱穴が確認され、この通路には本柱２本からなる門が取り付けられていたと考えられる。このような主要部への出入り口という一連の施設が確認されたことは、今回の調査をより有意義なものにし、かつ城館調査における醍醐味の一つを示すことができたと思う。

第30図　猪岡城址説明略図（紫桃正隆氏作成）

次に、同じ４号平坦部で南西側の一部が検出された掘立柱建物である。確認された柱穴配置からは平面形式も定かにできないが、その柱間など



第31図　門跡と棚列のセット関係

の規模や礎石をもつ柱穴があることなどから、館の中枢部に構える主要建物であったことは疑いがない。

次は堀跡であるが、今回の調査区内において普請された痕跡をもつものは第5号・第6号堀跡で、いずれも切岸まで掘り抜かれている。第6号堀跡では、堀の西側に直線状に残る土塁の高まりが部分的に観察され、往時の様相を僅かながら窺うことができる。地元の方の話によれば、かつてこの周辺には明瞭な堀と土塁が見られたそうであるが、開田の際に土塁状の高まりは削られ低みに埋められたらしい。第5号堀跡についても同様の話をかつての地主から聞くことができた。この2つの堀跡は、何らかの理由で大きな曲輪を区切る必要があったことから普請されたものと思われる。

2．縄張と城域

猪岡館の城域については、柴桃氏が「その規模は東西200m、南北150mもある仲々壮大な城館」との見解を示しているが、今回の調査で言えば「東西200m」とは、第1号平坦部と第5号平坦部を除いた範囲と思われる。確かにこの2つの平坦部からは城館期に属する遺構は確認されていないが、城域として全体を考える場合にはこの部分まで含めておくべきと思われたので、付図2の縄張図、第33図の堀割り区画図にはそのように表した。一方、南北方向の規模は「150m」としているが、宅地・道路造成が著しい北側の区画は不明瞭であり、縄張図には表せなかった。第33図の堀割り区画図では、猪岡館の曲輪を全部で8つ想定した。今まで館の中枢と思われる曲輪を3号・4号平坦部としてきたが、ここでは4号平坦部を現道付近で曲輪Ⅳ・曲輪Ⅴと分けている。最も標高のある曲輪Ⅳが主郭である可能性が高いが、今回この周辺で確認された遺構がわずかであること、また曲輪Ⅴとの関連が不明確であるため、主郭となる曲輪については限定できない。しかし、曲輪Ⅳ・曲輪Ⅴに館の中枢機関が存在したことは間違いないと考えられる。なお、第32図は明治42年に作成された「北上川河川台帳」に今回の調査範囲を被せたもので、縄張図で表現されていない第2号堀跡の北側への屈曲の具合などが見て取れる。この図からも猪岡館の東西方向の城域は狭めるが、北側が

やはり明瞭でない。

また、氏は第30図にあるように、本丸（主郭）の規模を付近で最も標高の高い東西100m、南北120mの高台部分としているが、これは今回の発掘調査からも裏付けられた。図の丸山氏宅北側の畑地の標高はおよそ43.0mで、沖積地面との比高は26mほどである。

調査によって、この猪岡館は東西350～400m、南北150～200mの規模を有し、主要部は二重の堀によって守られる平城連郭形式の城館であることが明らかとなった。中世に属する出土遺物がほとんどないため時期は明確にできないが、おそらくは16世紀中頃から奥羽仕置の間に存続し、北上川の水運を含めた交通の要衝として機能していたものと思われる。このことに関連して防御という点では、北上川および東側の山地から流れる沢という、自然地形と土塁を利用しての防御はある程度完璧なものと思われるが、最も守りを堅くすべき北西側の防御施設がもはや明瞭でない。地形から見ても弱点は山地から延びている丘陵、北上川の反対側にある山手であったことは想像に難くない。しかしその当時、猪岡館城主は水堀・空堀といった防御施設を程良く配置できる場所として、また湯々と時には荒々しく流れる北上川を臨むことができる最高の場所としてこの地に城を構えたのであろう。

野外調査においては、調査期間を大幅に超過し大勢の方々にご協力いただいて、ご迷惑をおかけして何とか終了できた。この報告においては、城館特有の用語に対する筆者の認識不足から、このようなまとまりのないものとなってしまったことをお詫びいたします。

〈引用・参考文献〉

小山内透ほか　(1997)：『松本館跡発掘調査報告書』　岩文振埋蔵文化財調査報告書第256集　(財)岩文振

齋藤博司　(1996)：『猪川館跡発掘調査報告書』　岩文振埋蔵文化財調査報告書第203集　(財)岩文振

杉沢昭太郎　(1996)：『白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　岩文振埋蔵文化財調査報告書第248集　(財)岩文振

千田嘉博ほか　(1993)：『城館調査ハンドブック』　新人物往来社

千葉貞雄　(1988)：『藤原氏滅亡後の平泉圏百年　葛西氏・千葉氏について』

高橋與右衛門　(1988)：『笹岡館跡発掘調査報告書』　岩文振埋蔵文化財調査報告書第124集　(財)岩文振

東北中世考古学会　(2001)：『掘立と竪穴－中世遺構論の課題』　東北中世考古学叢書2　高志書院

中村　裕ほか　(1984)：『昭和57年度伊勢館遺跡発掘調査報告書』　大東町文化財調査報告書8集　岩手県大東町教育委員会

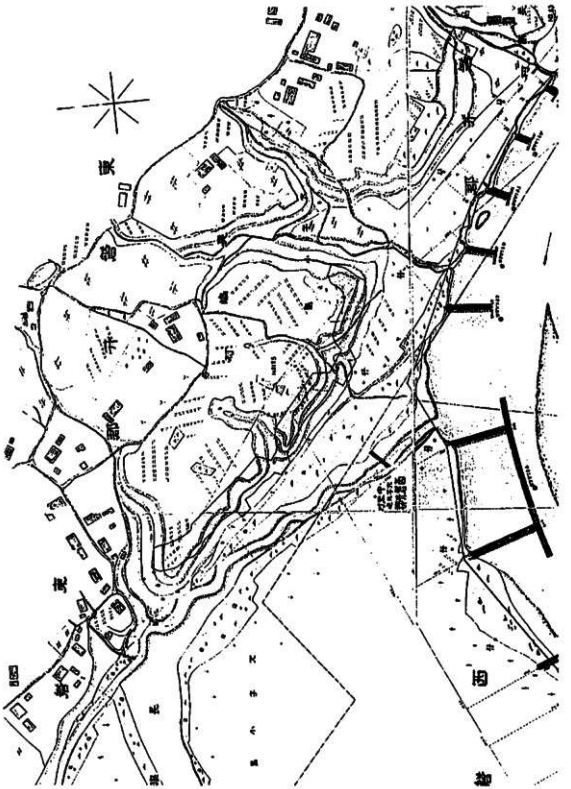
本堂寿一　(1997)：『日本城郭大系2』－青森・岩手・秋田－　新人物往来社

村田修三　(1987)：『国民中世城郭辞典－』－北海道・東北・関東－　新人物往来社

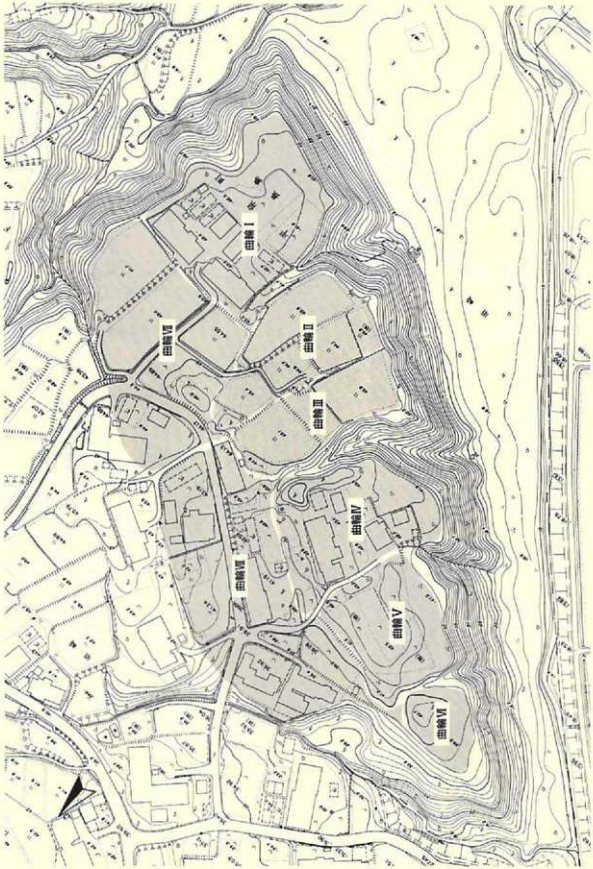
室野秀文　(2002)：『奥羽史研究叢書四　鎌倉・室町時代の奥州』「第六章　陸奥北部の館」　高志書院

佐々木浩一ほか　(1993)：『根城－本丸の発掘調査』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第54集　八戸市教育委員会

石井　進ほか　(1991)：『中世の城と考古学』　新人物往来社



第32図　北上川河川台帳図(明治42年)と調査区



第33図　猪岡館の堀割り区画（S＝1：2,000）

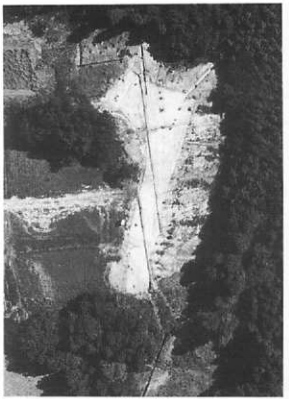
表3　柱穴計測一覧表

番号	規模(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	関連遺構
P001	29×27	24.3	41.165	
P002	24.5×24.5	23.9	41.197	
P003	22×22	11.2	41.375	
P004	21.5×21	33.9	41.166	
P005	19×18	19.5	41.355	
P006	25.5×21	32.6	41.167	1号掘立柱建物
P007	31×30.5	20.3	41.177	1号掘立柱建物
P008	23×20	22.4	41.09	
P009	17×16	15.4	41.386	
P010	20×17	20.2	41.335	
P011	29×26	22.5	41.337	1号掘立柱建物
P012	26×25	48.8	41.109	
P013	33×32	32.7	41.292	
P014	22×21	22.6	41.348	1号掘立柱建物
P015	29×20	48.4	41.106	
P016	22×21	10.6	41.490	1号掘立柱建物
P017	49×36.5	44.7	41.214	1号掘立柱建物
P018	25×23	21.4	41.534	
P019	36×30	43.3	41.236	1号掘立柱建物
P020	24×24	4	41.706	
P021	17.5×17	12.9	41.395	1号掘立柱建物
P022	21×21	13.8	41.321	
P023	31×31	39.2	41.167	
P024	20×17	15.9	41.3	
P025	18×17	8.8	41.669	
P026	19×19	10.3	41.56	
P027	18×17	8.2	41.452	
P028	25×21	7.2	41.487	1号掘立柱建物
P029	21×20	11.4	41.31	
P030	26×17	53	41.281	
P031	26×26	12.3	41.566	
P032	20×19.5	24.8	41.204	
P033	28×25	20.3	41.142	
P034	22×21	27.8	41.115	
P035	25.5×23	9	41.124	
P036	20×19	8.4	41.232	
P037	27×26	12.9	41.285	
P038	22×22	16.6	41.326	
P039	28×28	16.5	41.465	
P040	25×23	27.4	41.068	
P041	27×18.5	19.3	41.077	
P042	31×14	7.3	41.527	
P043	24×22	22.4	41.078	
P044	24×22	36	40.995	
P045	28×27	8.6	41.349	
P046	27×26	8.4	41.292	
P047	20×20	11.2	41.129	
P048	23.5×22	7.7	41.1	
P049	24×23	7.8	41.031	
P050	24×23	8	40.922	
P051	25×22	21.6	40.554	
P052	21.5×21.5	15	40.728	
P053	25×25	11.5	40.85	
P054	30×26	12.8	40.91	
P055	26×25	15	40.951	
P056	25×22.5	12	41.067	
P057	27×26	11.7	41.124	
P058	20×20	7.7	41.225	
P059	25.5×25	31.5	41.025	
P060	24×23.5	24.4	41.3	1号掘立柱建物
P061	28×24	16.5	41.134	
P062	29×27	17.3	41.056	
P063	25×19	14	41.017	
P064	26×25	20.4	40.936	
P065	24×23.5	9.5	40.956	
P066	20.5×18	8.8	40.886	
P067	26×23	19.5	40.631	
P068	38×31	40.0	40.500	2号門跡
P069	30×28	12.5	40.66	
P070	57×54	61.2	39.970	1号門跡
P071	55×54	28.0	40.302	3号門跡
P072	25×24	11.3	40.606	
P073	25.5×24	16.9	40.706	
P074	23×21	20.5	40.87	
P075	49×31	27.9	40.8	
P076	27×23	14.1	40.876	
P077	28×28	11.5	40.793	
P078	30×29	11.9	40.716	
P079	24×23	7.8	40.63	
P080	24×24	8.9	40.516	
P081	22×18			
P082	30×25	8.2	40.954	
P083	32×26	9.5	40.875	
P084	20×18	3.1	40.804	
P085	17×12	8	40.705	
P086	18×18	9.6	40.641	
P087	15×14	3.4	40.805	
P088	24.5×23	5.5	40.712	
P089	16×16	3.5	40.765	
P090	16.5×12	2.3	40.675	
P091	24×23	24.1	41.243	1号掘立柱建物
P092	20×16	9.1	41.298	
P093	41×39	36.4	41.137	1号掘立柱建物
P094	52.5×32	27.5	41.46	
P095	18×17	6.8	41.651	
P096	17×17	3.3	41.474	
P097	20×17.5	16.2	41.399	
P098	22×22	5.2	40.92	
P099	57×37	52.9	41.161	1号掘立柱建物
P100	63×49	41.2	40.316	1号門跡
P101	49×41	33.5	40.164	4号門跡
P102	45×40	35.7	40.193	4号門跡
P103	60×56	56.0	40.140	1号門跡
P104	63×51	42.4	40.240	2号門跡
P105	33×30	10.9	40.57	
P106	54×34	34.9	40.166	
P107	29×26	10.8	40.498	
P108	55×51	22.4	40.284	3号門跡

号	规模(cm)	深度(cm)	底面标高(m)	附	近	遗	构
P109	35×34	39.2	40.325	2号门路			
P110	欠番						
P111	22×20	5.1	40.519				
P112	64×64	56.0	40.237	1号门路			
P113	29×24	15.2	40.584				
P114	26×24	8.9	40.748				
P115	12×12	2.6	41.517				
P116	38.5×26	4.8	41.236				
P117	30×27	29.6	40.938				
P118	50×42.5	36.9	41.095	1号掘立柱建物			
P119	28×27	36.7	41.202	1号掘立柱建物			
P120	23×18	6.2	40.564				
P121	25×19	12.2	40.373				
P122	40×35	14.2	40.192				
P123	21×19	13.6	40.34				
P124	29×22						
P125	63×58	69.7	38.34	1号通路跡			
P126	44×42	34.0	40.207	2号門跡			
P127	28×23.5	19.3	41.9				
P128	24×24	11.8	41.848				
P129	29×21.5	5.5	41.762				
P130	15×15	8.6	41.281				
P131	26×29	19.4	41.28				
P132	43×34	11.5	41.385				
P133	40×33	9.9	40.261				
P134	32×31	7.2	40.45				
P135	22×20	37.3	42.242				
P136	24×21.5	7.9	42.383				
P137	25×23	24.1	42.18				
P138	20×19	21	42.13				
P139	25×17	12.6	42.23				
P140	21.5×19	8.9	42.257				
P141	23×22	24.1	42.367				
P142	27×21	22.7	43.176				
P143	29×25	22.9	43.178				
P144	32×27	34.2	43.208				
P145	34×31.5	8.9	43.318				
P146	23×20	32.6	43.2				
P147	31×26	36.4	43.114				
P148	24×23	33.2	43.117				
P149	24×23	18.3	42.786				
P150	欠番						
P151	20×19	12.9	43.087				
P152	22×20	27.8	43.006				
P153	46×44	17.2	42.651				
P154	31.5×27	17.3	43.157				
P155	34×31	24	42.972				
P156	36.5×32	18.4	43.025				
P157	51×37	16.1	43.02				
P158	欠番						
P159	欠番						
P160	55×54	15	42.772				
P161	50×46.5	9.5	42.707				
P162	48.5×46	7	42.646				

写　真　図　版

写真図版1　空中写真



1号平坦部全景

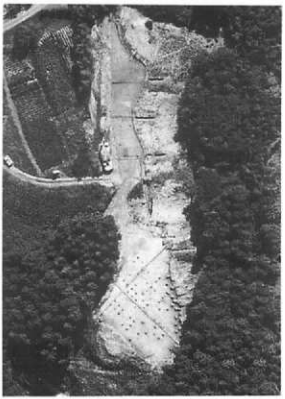
2号(下)・6号(上)平坦部全景

3号平坦部全景

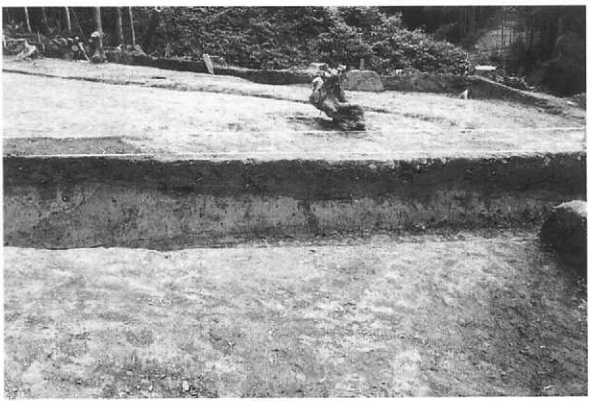
4号平坦部全景

写真図版2　各平坦部の空中写真(1)

3号(上)・4号(下)平坦部全景



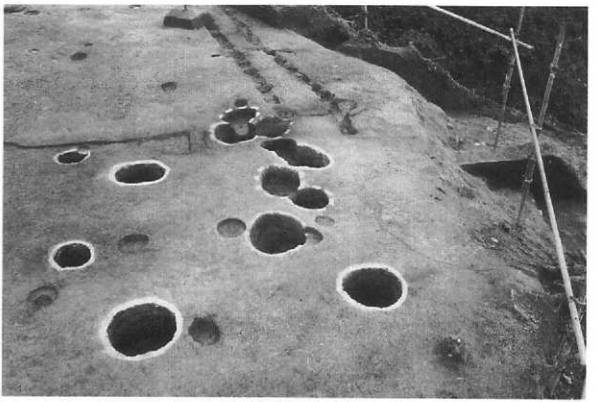
4号(上)・5号(下)平坦部全景



1号平坦部 基本層序

写真図版3　各平坦部の空中写真(2)・基本層序

4号平坦部 掘立柱建物



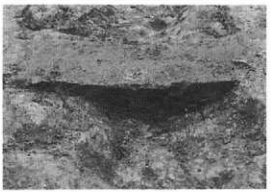
4号平坦部 門跡・柵列・整地部分

写真図版4　掘立柱建物・門跡周辺

1号土坑

1号溝跡

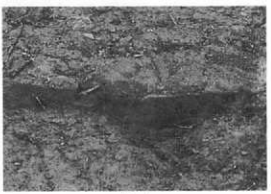
埋 土



埋 土

2号溝跡

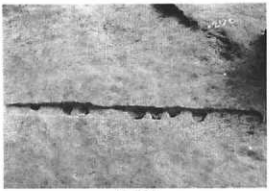
作業風景



埋 土

1号平坦部 切岸

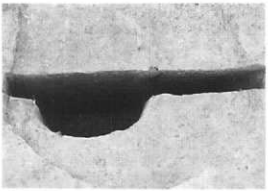
写真図版5　1号平坦部 検出遺構



5号柵列

1号墓壙

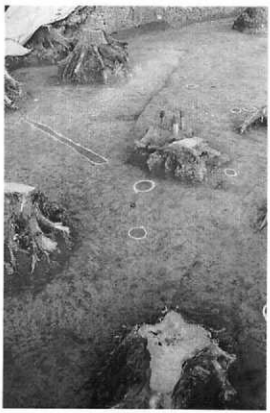
埋 土



埋 土

作業風景

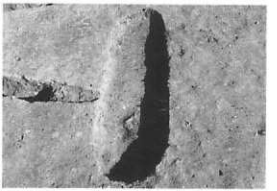
2号平坦部 切岸トレンチ



柵列・柱穴検出状況

写真図版6　2号平坦部 検出遺構

3号(右)・4号(左)柵列



8号土坑

埋　土（右が3号）

埋　土

9号土坑

10号土坑

埋　土

埋　土

写真図版7　3号平坦部 検出遺構(1)

7号(右)・8号(中)・10号(左)溝跡

7号溝跡 埋土

8号・10号溝跡 埋土

9号溝跡

11号溝跡

埋 土

埋 土

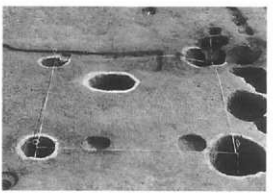
写真図版8　3号平坦部 検出遺構(2)

3号平坦部 近景

3号平坦部 切岸トレンチ

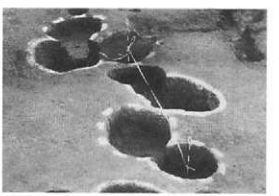
1号掘立柱建物

1号門跡



2号門跡

3号門跡

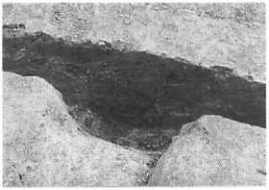


4号門跡

写真図版9　3号平坦部(3)・4号平坦部 検出遺構(1)

1号(左)・2号(右) 柵列

1号柵列 埋土

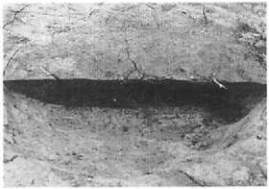


2号柵列 埋土

1号通路跡 全景

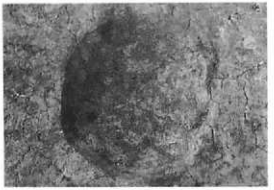
2号土坑

1号通路跡付近の堆積状況

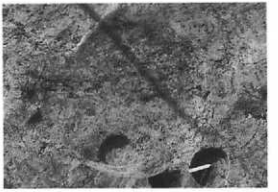


埋 土

写真図版10　4号平坦部 検出遺構(2)

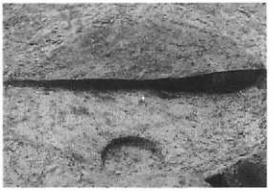


3号土坑

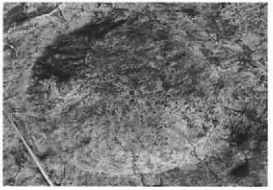


4号土坑

埋　土

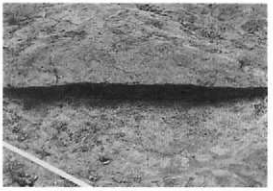


埋　土



5号土坑

6号土坑



埋　土

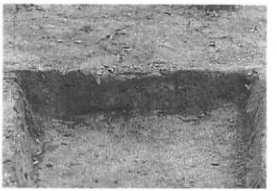
埋　土

写真図版11　4号平坦部 検出遺構(3)

7号土坑

3号溝跡

埋 土



埋 土

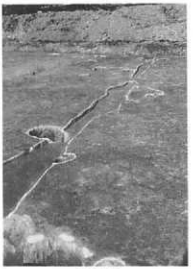
4号溝跡

5号溝跡

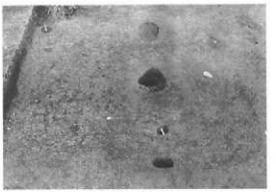
埋 土

埋 土

写真図版12　4号平坦部 検出遺構(4)



6号溝跡



1号竪穴状遺構

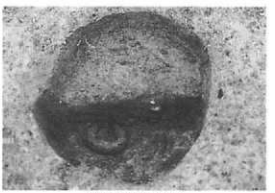
埋 土

埋 土

P104 埋土

P125 埋土

P126 埋土



P66 鉄釘出土状況

写真図版13　4号平坦部 検出遺構(5)

4号平坦部 調査前の状況

4号平坦部 切岸トレンチ(1)

4号平坦部 切岸

4号平坦部 切岸トレンチ(2)

5号平坦部 検出状況

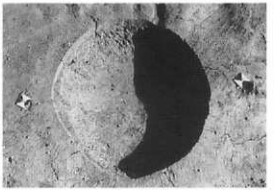
5号平坦部 切岸トレンチ

作業風景

猪岡館 遠景（西→）

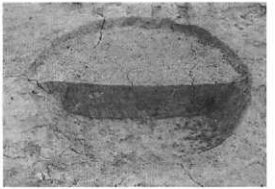
写真図版14　4号平坦部⑥・5号平坦部 検出状況

11号土坑



12号土坑

埋　土



埋　土

12号溝跡

6号平坦部 切岸トレンチ

埋　土

2号・6号平坦部から南を臨む

写真図版15　6号平坦部 検出遺構

1号堀跡 全景

1号堀跡 堆積状況

調査区外1号堀跡

1号堀跡 トレンチ

2号堀跡 全景（東→）

2号堀跡 トレンチ

2号堀跡 全景（北東→）

2号堀跡 堆積状況

写真図版16　1号堀跡・2号堀跡(1)

調査区外 2号堀跡(1)

調査区外 土塁の痕跡

調査区外 2号堀跡(2)

調査区外 2号堀跡と土塁の痕跡

3号堀跡 全景

調査区外 3号堀跡

3号堀跡 トレンチ

調査区外 3号堀跡と土塁の痕跡

写真図版17 2号堀跡(2)・3号堀跡

4号堀跡 堆積状況

4号堀跡 トレンチ

5号堀跡 全景（北東→）

5号堀跡と土塁

5号堀跡 全景（西→）

5号堀跡 トレンチ

5号堀跡 堆積状況

5号堀跡が巡る主郭部

写真図版18　4号堀跡・5号堀跡

6号堀跡 全景

6号堀跡 全景（杭列完掘）

堆積状況

杭列の拡大

切岸側から撮影

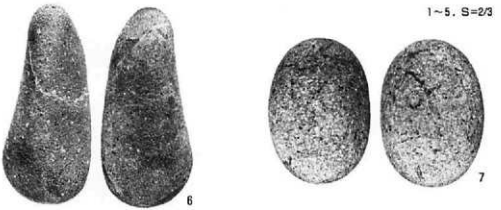
調査区外 土塁の痕跡(1)

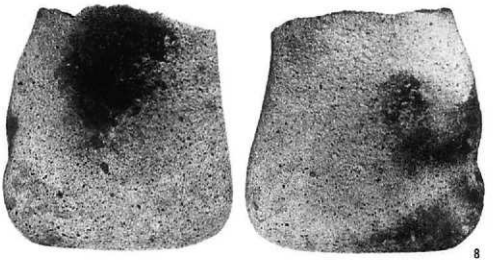
調査区外 土塁の痕跡(2)

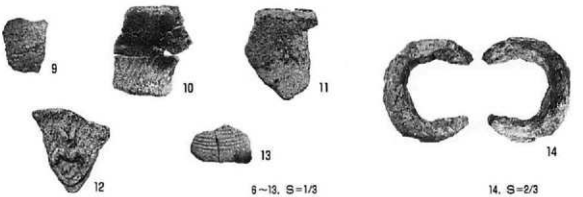
調査区外 土塁の痕跡(3)

写真図版19　6号堀跡

1～5. S=2/3







6～13. S=1/3

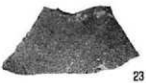
14. S=2/3

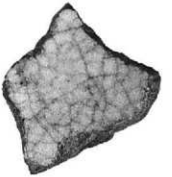
写真図版20　出土遺物(1)

銭貨1 (15・16・17接合)

銭貨2 (18・19・20接合)

銭貨3 (21・22接合)





15~28. S=1/1

写真図版21　出土遺物(2)

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	木村昇
〔管理課〕	
課長	韮沢正吾
課長補佐	山崎善光
〃	山岸直美
主査	中嶋賢一
〔調査第一課〕	
課長	佐々木勝
課長補佐	佐々木清文
〃	高橋義介
文化財専門員	小山内透
文化財調査員	吉田充
〃	亀大二郎
〃	佐々木信一
〃	早坂淳
〃	小松則也
〃	金野進
〃	野中真盛
〃	金子昭彦
〃	阿部孝明
〃	阿部勝則
〃	羽柴直人
〃	高木晃
〃	長村克稔
〃	星幸文
〃	杉沢昭太郎
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	青山紀和
〃	西澤正晴
〃	村木敬
〃	福島正和
〃	北村忠昭
〃	八木勝枝
〃	米田寛
〃	丸山浩治
〃	北田勲
〃	島原弘征
〃	中村絵美
期限付調査員	坂部恵造
〃	袰地剛
〃	玉山健一
〃	吉田真由美
〃	小林弘卓
〃	木村ひかり
〃	藤原大輔
〃	川又晋
〃	太田代一彦
〃	江藤敦
〃	立花公志

副所長	高橋正儀
嘱託	高橋照雄
〃	加藤美代子
〃	湯沢邦子
〃	伊藤滋子
〔調査第二課〕	
課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
文化財専門員	金子佐知子
文化財調査員	赤石登
〃	阿部眞澄
〃	飯坂一重
〃	鈴木裕明
〃	久慈泰彦
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	星雅之
〃	佐藤淳一
〃	半澤武彦
〃	皆川英香
〃	溜浩二郎
〃	丸山直美
期限付調査員	齋藤麻紀子
〃	吉田里和
〃	菊池賢
〃	立花裕
〃	駒木野智寛
〃	原美津子
〃	石崎高臣

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第398集

猪岡館跡第２次発掘調査報告書

一関遊水地事業関連発掘調査

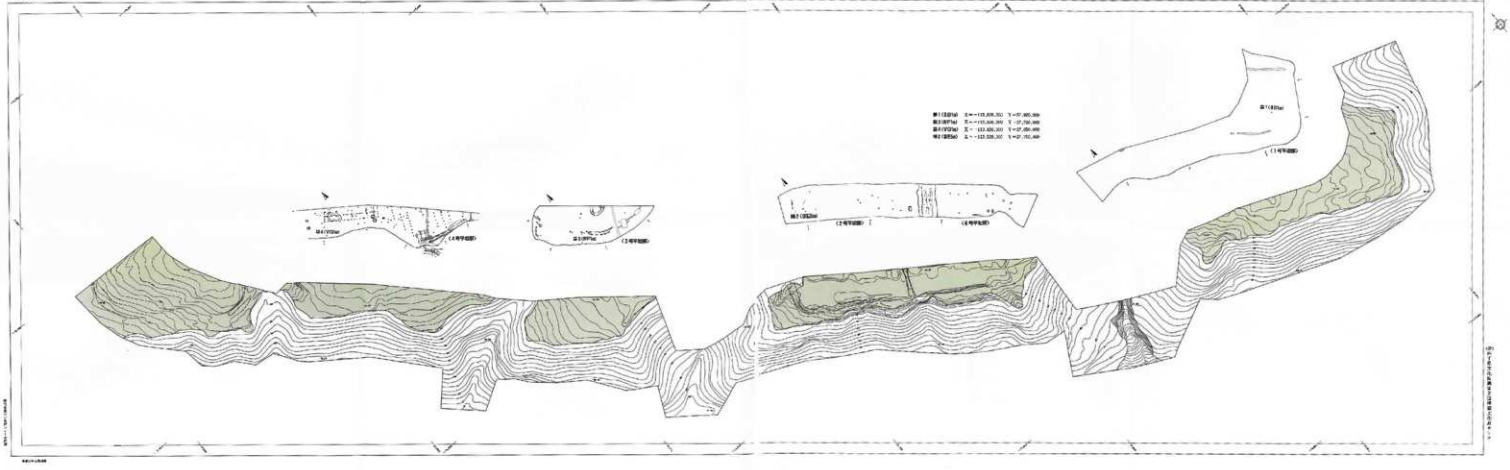
印　刷　平成15年２月21日
発　行　平成15年２月28日

発　行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185
電　話　(019)638-9001
ＦＡＸ　(019)638-8563

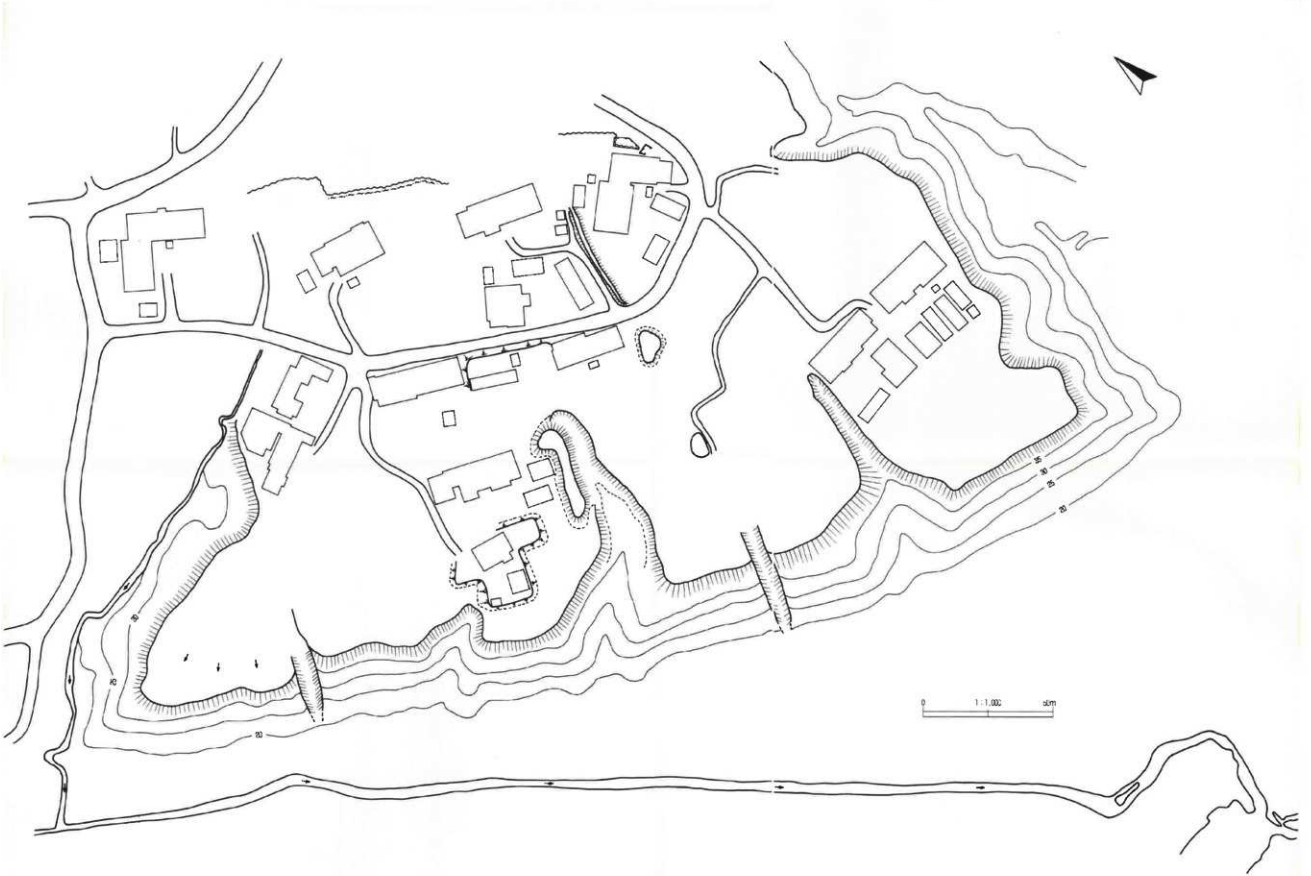
印　刷　大場印刷工業株式会社
〒020-0062　盛岡市長田町14番31号
電　話　(019)623-3228

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2003

猪岡館跡現況地形図



付図1　猪岡館跡現況　原寸(S＝1/500)



付図2　猪岡館跡縄張図